

朝鮮民主主義人民共和国

朝鮮民主主義人民共和国

面積 12万0538 km²

人口 約1500万人 (1974年)

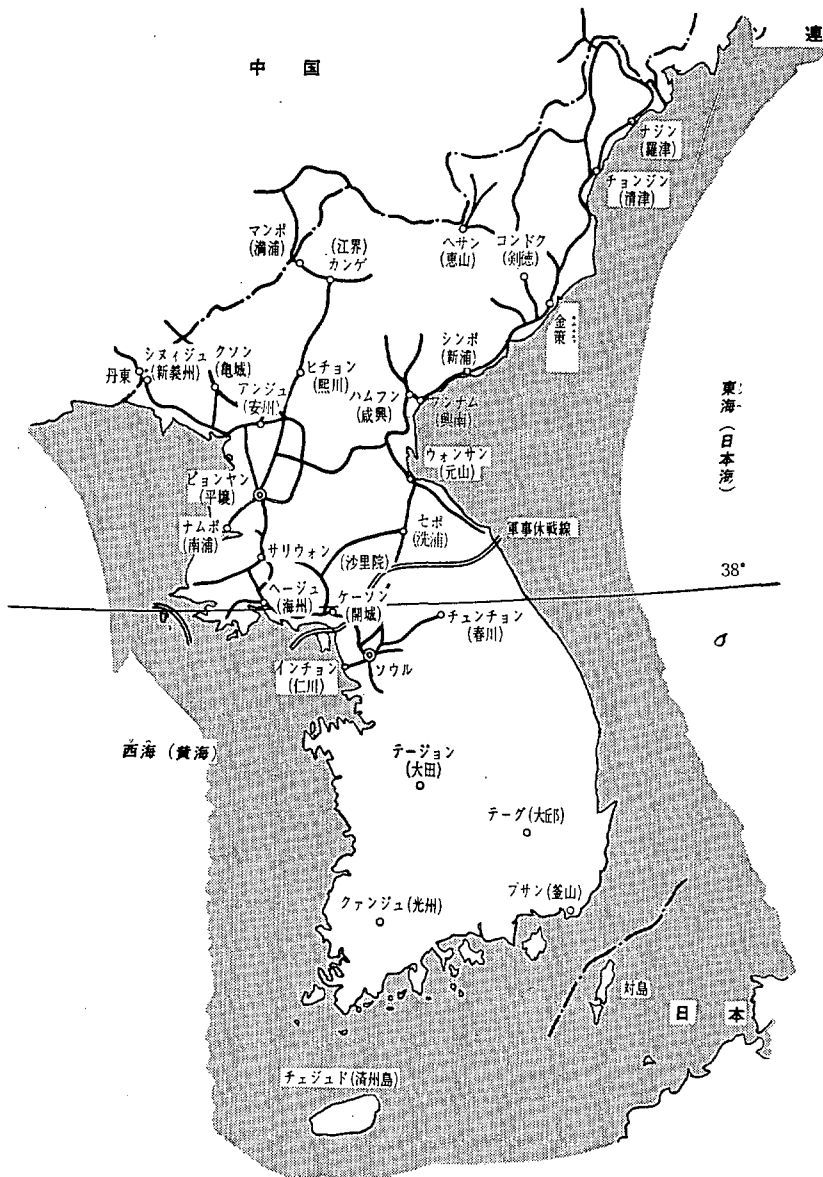
首都 ピョンヤン (平壤)

言語 朝鮮語

政体 社会主義共和制

元首 金日成 (共和国) 主席

通貨 ウォン (1米ドル=2.15ウォン, 1974年末現在)

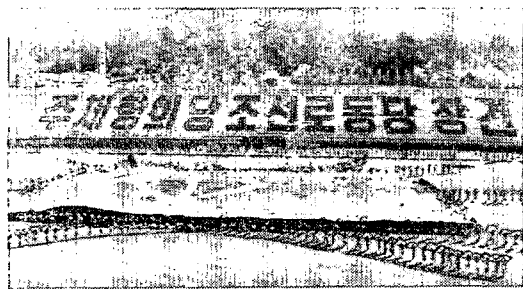


1975年の北朝鮮

—異常な国民総動員と外交攻勢—

はじめに

1975年の朝鮮民主主義人民共和国は、「三大革命グループ」を中核として、6カ年計画の1年繰り上げ達成をめざす国民総動員に全力を傾倒しつつ、韓国にたいしてはきびしい対決と革命化政策を示しつつげた。さらに対外的には、金日成主席を先頭として、未だかつてない大規模な外交攻勢を、中国、東欧諸国、中東諸国、第三世界諸国、



労働党30周年記念式典

非同盟諸国に対して展開した。その結果、国内的には、一応8月末に数字的には6カ年計画を1年以上繰り上げ達成したとされ、国際的には第30回国連総会で、はじめて北側決議案を可決にもちこむという成果を生んだ。しかし、その反面、国内的にも国際的にも新たな矛盾を露呈させることとなり、厳しい試練の時期に直面しはじめたものと見なされる。

国内政治

この年は、前年初頭からはじめられた「社会主義大建設事業に総動員」する運動を、さらに強力化して、6カ年計画の繰り上げ達成(目標は10月10日の党創立30周年記念日)に最後の力をふりしぼることに全力があげられた。そこでは、前年らいの

「速度戦」「電撃戦」「殲滅戦」といった戦闘的スローガンが、いっそう声高に唱えられたことはいうまでもないが、これをいっそう加速するために、唱えられはじめたのが「抗日遊撃隊式活動方法」をすべての活動に導入し具現することと、「全社会をチュチュ(主体)思想で一色化する」とことという2点であった。

この2点は、金日成主席が年頭に発表した「新年の辞」にも明確に出されているが、その出発点となったのは、これまでに公表されていない朝鮮労働党中央委員会第5期第9回総会であろうと思われる。この会議は、恐らく1974年10月半ば(10月13~15日ころか?)に開催されたものとみられ、その決定は74年10月17日付労働新聞社説「全党・全国が今年の計画を超過遂行する総突撃戦にこぞりたとう」、同日付同紙論説「全社会を金日成同志の革命思想、チュチュ思想で一色化することはわが党と人民のもっとも崇高な革命偉業である」、同年10月21日付労働新聞社説「全社会を偉大なチュチュ思想で一色化する偉業に合致するよう党を強化しその戦闘的成功をいっそう強めよう」などに集約的に打ち出されたものと推定される。またこの会議がよびかけた「総突撃戦」は、恐らく74年末までに「70日戦闘」として展開されて、一定の成果を収めたものようである。そのため、本年度の繰り上げ達成運動の中で、この「70日戦闘速度」の奇跡再現が、しばしば呼びかけられるようになったのである。この「70日戦闘速度」をはっきり打ち出したのは、本年1月29日付労働新聞社説「チュチュ朝鮮の英雄的気概をはせた『70日戦闘速度』でいっそう力強く前進しよう」であるが、この中に「昨年の戦闘をしめくくる時期にとげられたこうした大進軍速度」といわれているので、これが74年10~12月のものと推定される。この社説はさらに「偉大な首領は、昨年の戦闘を勝利のうちにしめくくるべき決定的な時期に、全党

と全人民を総突撃戦へと呼びおこし、大戦闘の方向と方途、攻撃目標を明らかにした」と指摘している。ではこのように重大な意味をもった党中央委第5期第9回総会が、なぜ公表されず、その決定も明らかにされなかったのかという点に疑問が残される。筆者の推量では、第一に、恐らくこの時点では経済建設の遂行がかなり重大な難関にぶつかっており、それを突破する「突撃戦」をよびかけたが、その結果がわかるまでは、まだ自信をもてなかったという状況にあったものと思われる。第二には、この時点で、党内にも何らかの重大な摩擦・対立が生じ、これを金主席擁護グループが、きわめて戦闘的な姿勢で乗り切ったのではないかという推測が成り立つ。そのことは同じ1月29日社説に、次のような箇所があることから裏付けられよう。「こんにちのすべての勝利と同じように『70日戦闘』における大勝利もやはり何よりも偉大な首領金日成同志がここ数年來わが党中央を党政策の擁護貫徹のためには命もなげださうのもっとも忠実な活動家で構成し、党活動で決定的な転換を起こすように賢明に導き、国家経済機関の機能を強化しうよう画期的な措置を講じた結果もたらされたのである」。ここでは、金主席が近年、「党中央」を完全に再構成して、「国家経済機関」にも一定の効果的な措置を講じたことが明らかにされている。これは具体的には金主席が73年2月に開始した「三大革命グループ」運動が、この中央委総会と「70日戦闘」を機に、完全に党中央を掌握し、経済機関を操縦しう実権ある存在となってきたことをものごとがたつていよう。

この「三大革命グループ」は、金主席の次男金正一を最高指導者として組織された、青年中心の「近衛隊」「決死隊」「突撃隊」であると推測されているが、今や全国の工場、事業所、集団農場に送りこまれて、現地の指導幹部の日和見主義をおさえこみ、勤労者を猛烈な突撃戦労働にかり立てる中心部隊となっているのである。そのやり方の一端を表現しているものが、本年1月5日付労働新聞論説「すべての仕事を大胆に行なうことは英雄的朝鮮人民の固有な革命的働きぶり」である。この論説は、朝鮮人民が、首領金日成の「いかなる厳しい難関も大胆にのりこえて進む」指導によると「無比の英雄性と大胆性を育てたし、すべて

の仕事革命的に展開していく気風をもつようになった」ことを強調しながら、次のようにいう。

「実にこんにちの厳かな現実には、消極と保守、沈滞と足踏みを少したりとも許さないし、すべての仕事を大胆に考え、実践することを切実に要求している。

すべての仕事を大胆に行なう気風はなによりもまず、闘争目標を高くかかげなみなみならぬ革命的展開力をもってそれを占領していくことにあらわれる。(中略)

革命家は決して闘争目標を低くさげて働くことはできない。闘争目標を低くたてることは、それ自体足踏みをしようとする消極的なものとしてこれは革命的な闘争気風とは何のゆかりもない。(中略)

すべての仕事を大胆に行なっていく気風はまた、疾風のごとくひた走り、すべての活動を突撃的にやりとげることによって表われる。

革命の発展と社会の発展において前進速度は非常に重要な問題である。前進速度を非常に早くおしすすめ最短距離内に最上の成果をおさめる時、革命と建設においてはたえまない昂揚と奇跡がおこるようになる。(中略)

難関を恐れず、自力でたちむかってゆくことは、すべての仕事を大胆に行なううえで提起されるいま一つの重要な問題である。(中略)

難関があるといって退けば退くほど道は閉ざされるが、それを勇敢にのりこえてゆけば道が開かれ、行きづまった問題が解決される。難関を克服するか否かということは、自力更生の革命精神を高く発揮するか否かにかかっている」

この一節から明らかに、生産現場から党中央委内部にいたるまで、当面した「難関」にさいして、目標を低くさげ、速度をゆるめ、一定の支援の導入を要求する“現実主義派”が根強く存在したのたいてして、「三大革命グループ」が激しい闘争を展開し、遮二無二前進する方向で、活動をくりひろげていることがうかがわれる。「70日戦闘」は、かれらの一定の勝利の指標となった。

「新しい『70日戦闘速度』は、わが党が偉大な首領の教えを貫く武器としてかつてなく強化され、社会の心臓として戦闘的に脈うちながら、全国が忠誠の血でわき立つようにし、青春

の覇気で躍動するようにしてきた過程で生まれたものである」(上記、1月29日付社説)

つまりここで三大革命グループを中心とする「青春の覇気」で躍動する青年派が、党と社会の実権を握る存在として、はっきりと台頭してきたのである。

こういう前年度からの布石の上に立って、本年の主要方針をきめたのが、労働党中央委第5期第10回総会(2月11日~17日)であった。この会議の議題は、①偉大な首領金日成同志が示した思想・技術・文化の三大革命課題遂行のための指導活動状況について、②朝鮮労働党創立30周年にあたっての党中央委員会のスローガンについて、の二つであった。この第一議題は、いうまでもなく「三大革命グループ運動」が「誇らしい成果」を収めたことを総括するものであった。

そこでは、「全社会を金日成同志の革命思想で一色化する聖なる偉業」を遂行すること、「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に」のスローガンで活動方法と活動作風に根本的な転換を起こすこと、「70日戦闘速度」を堅持して絶えまない大飛躍、大革新をとげて行くこと、などの課題が強調され、「各級党組織が三大革命グループ員と心を合わせて」働き、「全党員と勤労者が偉大な首領金日成同志を首班とする党中央委員会のまわりにいっそう固く団結」するように表明した。

第二議題で採択された党創立30周年のスローガンは、総計168項目におよぶ大なるもので、こまかく紹介している余裕はないが、大まかにその構成を提示すると次のようになる。(数字は、順序によって付したナンバー)

- | | |
|-----------------------|---------|
| (1) 中心原則綱領 | 1~16 |
| (2) 基本的よびかけ | 17~32 |
| (3) 経済建設のよびかけ | 33~92 |
| (4) 技術革命のよびかけ | 93~95 |
| (5) 文化革命のよびかけ | 96~110 |
| (6) 防衛に関するおびかけ | 111~115 |
| (7) 社全安全に関するよびかけ | 116~118 |
| (8) 幹部、活動家へのよびかけ | 119~122 |
| (9) 南朝鮮革命と統一へのよびかけ | 123~142 |
| (10) 在日朝総連と在外同胞へのよびかけ | 143~150 |

(11) 全世界へのよびかけ 151~168

このうち(1)は、もっぱら金日成主席を礼讃、主席への無条件的忠誠を訴え、その最近の教示を強調したものである。(2)は、各運動体や組織によびかける形で展開されているが、その順序と内容は次の通りである。

- | | |
|----------------|-------|
| ① 三大革命グループに対して | 17~21 |
| ② 党員に対して | 22~23 |
| ③ 政権と制度について | 24~26 |
| ④ 勤労者団体に対して | 27~28 |
| ⑤ 青年団体、青少年に対して | 27~32 |

この中で、「三大革命グループ」が党員に優先する冒頭に来ていること、末項ではあるが青年が重視されていること(婦人に対するよびかけはない)は重要である。中心原則綱領部分にあたる第13に「偉大な首領金日成同志がきずいたわが党の輝かしい革命的伝統を継承発展させ、チュチェの革命偉業を代を次いであくまで完成していこう」というスローガンがあり、さらに青少年向けの第30項も「首領の栄光にみちた青少年時代に学び、首領と党と革命偉業に限りなく忠実な近衛隊、決死隊になり、代をついで革命をあくまでつづけよう」というのがあるので、今や、「代をついで」という問題がきわめて重視されはじめていることが判明するからである。

また、このスローガン中で、注目されるのは、「金日成同志の革命思想で全社会を一色化する」という課題(第4項)が、さらにふえんされて、「南朝鮮の革命隊伍を永久不滅のチュチェ思想で一色化せよ」(第127項)「総連をチュチェ思想で徹底的に一色化せよ」(第144項)とまでいわれるようになったことである。こういう姿勢からくる朝鮮統一のイメージは、「民族の太陽である偉大な首領金日成同志のまわりにかたく結集し、全民族の団結した力で分裂した祖国を一日も早く統一しよう」(第137項)という金日成傘下への統一イメージとなってあらわれる。これは、今後の南北統一問題に強く影響を及ぼさずにはおかないであろう。

このような中心方向確立の後をうけてひらかれた工業部門熱誠者会議(2月28日~3月4日)は、三大革命を中心にすえたものとなった。この会期中に金主席が行なった報告は「三大革命を力強く展開して社会主義建設をいっそう促進しよう」と題

するもので、三大革命グループの活動を全般的に支持・礼讃し、謝意を表するものとなった。

また、この報告は、最後に社会主義建設上の課題を列挙したが、その順序は「組織生活の強化」「学習の強化」「共産主義教育の強化」「人民政権機関の役割向上と、法の統制強化」「技術革命」「輸送の改善」「予備の動員」「国家計画を遂行する厳格な規律」「対外貿易の拡大」となっている。ここでは、純経済問題をのぞくと、組織、国家、法の統制を強化する課題が前面に出されているが、これは三大革命グループの活動によって起こった大きな党内、社会内の変動を、もう一度固定化して、きびしい統制規律でしばり直す必要が生じてきたことを物語っている。

さらにこの報告は末尾で、「全般的な国際情勢は、近い将来に革命的大事変の到来を予想させます。」「せまりくる革命的大事変を勝利のうちに迎えるために(中略)わが党の基本路線を徹底的に貫かなければなりません」「将来戦争が起こっても、また南朝鮮で革命が起こっても、それらをみなわれわれの革命に有利に利用して、祖国を統一し、革命の全国的な勝利をかちとらなければなりません」「わたしは、せまりくる革命的大事変を勝利のうちに迎えるためにこぞって力強くたたかうよう訴えます」と、「革命大事変」を連発して、きわめて緊張したよびかけを行なった。これには、大衆動員を極限にまで押しすすめるための理由づけという側面も考えられるが、同時に、当時の金日成自身の情勢判断を率直に示したのもいえることができる。同じように「革命的大事変」を主動的に迎えようという主張は、以前には1967年段階でしきりに行なわれたことがあり、それは68年のゲリラ南派作戦やプエブロ号捕獲事件の前ぶれとなったことがある。したがって、今回のこの指摘は韓国側に強い不安感、緊張感をひき起こす原因ともなるものであった。

4月8日～10日に最高人民会議第5期第5回会議がひらかれたが、ここでは、①1974年度国家予算の執行にたいする決算と75年度国家予算について②全般的11年制義務教育に関する法令の執行総括について、の2議案が審議されたのみで、とくに目新しいことはなく、前年までのような国際的訴えやよびかけも行なわれなかった。

しかし、その直後から、金主席の訪中、訪ヨーロッパ・中東を先頭とするはなばなしい外交攻勢が展開されたのであるが、詳細は日誌にゆずる。ただこの国際的な外交攻勢は、国内ではもっぱら金主席が、国際的にも高い評価をうける最高指導者の一人であり、チュチェ思想は世界的にも卓越した思想として、世界人民に歓迎され、学習されているという形をとって、喧伝・鼓吹され、「忠誠の総進軍」運動に拍車をかける材料として大々的に活用されていった。たとえば、その中で世界人民の声として宣伝されたものの中には、「人類史上人間の地位をもっとも高いところにあげ、人間をもっとも貴重な存在ならしめた金日成主席の思想」(フランスの大学教授)「金日成主席は朝鮮人民の首領であるばかりでなく、世界のすべての人民の首領である」(シンガポールの音楽家)、「20世紀の人類は元帥を偉大な首領として高くおしいだいている」(パナマ朝鮮友好文化協会書記長)、「金日成主義は、現代思想史において最高峰に到達した思想」(日本チュチェ思想研究会員)等々といった最高級の形容詞を冠した讃辞が、とめどなく紹介され、氾濫して行ったのである。

金主席への個人崇拜運動もさらに一段階エスカレートされた。内外に勲章、メダルが乱発されたのもその例である(日誌参照)。また金主席の誕生いろいろの足跡は、すべて革命の聖跡として記念化されて、青少年を中心とする国民はその拝観運動に動員され、ついに金主席自身の銅像も除幕された(10月19日)。全国革命史跡部門活動者大会(3月30日)の開催もそのひとつである。また、金主席の一族への崇拜運動も、これと平行して一段と激化した。3月23日には、平壤第一師範学校が政令で、金主席の実父の名を冠した「金亨稷師範学校」と改称され、金主席の実母康盤石女史は「朝鮮の偉大な母」、前夫人の金貞淑は「不撓不屈の共産主義革命闘士、卓越した婦人活動家」という形容詞で讃美され(3.8国際婦人デー中央報告会、11月17日の朝鮮民主女性同盟創立30周年記念報告会における金聖愛女同委員長の報告演説)、また主席の次弟で抗日パルチザン時代に死去した金哲柱に対しては「不屈の共産主義者金哲柱同志逝去40周年平壤市追慕会」(6月13日)がひらかれて、党・政府の高官が列席した。このような礼讃は金主席の叔父金

亨権や祖父母にまで及ぼされ、金主席一家は、まさに革命の「聖家族」の高みにもち上げられつつある。また現実には、金主席の一家けん族の網は、三弟金英柱党政治委・副総理、金聖愛女同委員長・党中央委最高人民会議常設会議員、外戚康良煜副主席をはじめとして、許淡副総理・外交部長、揚亨燮党中央政治委員、金炳何国家政治保衛部長、姜ヒョンス平壤市党責任秘書、黄長燁最高人民会議議長・同常設会議議長など、党・政府機関の要所要所にはりめぐらされ、事実上の金王朝を形成するにいたった。このような中で、次男金正一が、三大革命グループの最高指導者として脚光を浴びてきたため、その後継者指名がほぼ既定の事実となったのではないかという憶測が国際的に表面化した。しかし、さすがに、国際的評判をおもんばかったためか、金正一が存在と地位は国際的には公表されず、後継者指名もまだ公然化されてはいない。

このように、王朝の最高絶対者化する金主席への忠誠運動が徹底的におしすすめられる中で、8月末で6カ年計画が達成されたという報告がなされ、10月9日には朝鮮労働党創立記念大会が盛大に挙行された。参考までに、この大会の主席壇についた中央幹部のうち人名のあげられた25名を、発表順位のまま列挙すると下記の通りである。

崔庸健、金一、金東奎、崔賢、呉振宇、徐哲、朴成哲、林春秋、揚亨燮、李勇武、韓益珠、延亨黙、全文燮、金英男、許淡、玄武光、鄭準基、金仲麟、姜成山、崔載羽、孔鎮泰、洪元吉、南日、黄長燁、呉白竜。

この名前の中にはまず金英柱が入っていないが、かれは本年一貫してどの会合にも出ていない。9月9日の建国27周年記念中央報告大会、慶祝宴のさいの顔ぶれとくらべると、今回は、崔庸健、金一、徐哲、韓益珠、全文燮、鄭準基、崔載羽、洪元吉、南日らが増えている代わりに、李根模、柳章植、鄭京熙、朴守宋、尹基福、李虎華らが欠席している。会合に欠席したといっても降等されたとは限らないから、この2回を総合して、特に若手の台頭いちじるしいものを数えると、李勇武、李根模、揚亨燮、延亨黙、金英男、全文燮、柳章植、鄭準基、朴洙東、孔鎮泰らがあげられよう。これらが、三大革命グループ運動の展開

につれて、のし上がって来た若手の親衛隊と見なされる。

金日成総秘書はこの記念大会で「朝鮮労働党30周年にさいして」と題する綱領的な報告を行ない、ここでも「三大革命」の必要性を力説し、また翌10日夜には慶祝宴を主催して、「代をついで革命を最後までつづけなければなりません」と訴えた。

この党創立30周年記念行事は、6カ年計画を1年半繰り上げ達成した「勝利の大祭典」にしては、意外にもり上がらぬ白々しいものであった。この大会に列席した外国代表も、スペイン共産党、ルーマニア共産党、キューバ共産党、トーゴ人民連合、スリランカ首相調停室、ガイアナ人民民族大会党、ハンガリー愛国人民戦線、コスタリカ社会党、ウガンダ政府、ブルンジ民族統一進歩党、ラオス愛国戦線などの代表にとどまっている。

この記念行事後、年末までの重要なできごととして起こったのは、下記の三つである。

(1) 朝鮮人民軍最高司令官の命令発出

11月18日に開催された、「金日成政治大学、姜健総合軍事学校創立30周年記念報告会」の席上で、出席した金主席は発言せず、金一政務院総理がにわかに「朝鮮人民軍最高司令官の命令」を読み上げ伝達した。これは「敵の欺瞞的な『平和』術策には革命的原則をもって対処し、侵略戦争には革命戦争でこたえなければならぬ」と強調し、「人民軍の戦闘力を極力強化し、全般的な戦闘準備を完成するために教育教養事業で速度戦の炎を高め、忠実で有能な軍事政治幹部、チュチュ型の軍隊指揮員をより多く立派に育てなければならぬ」とも指摘した。また、「いかなる不意の時刻に敵が襲いかかってこようとも適時に断固たる反撃を加えられるよう常に緊張し動員された態勢を堅持し、敵が新たな戦争を挑発すればこの地で敵を一人残らず徹底的にうちのめし、かれらの侵略的野望をくじく万端の戦闘的準備をととのえなければならぬ」と命令したのである。

(2) 朝鮮労働党中央委第5期第11回総会開催

11月19日から21日にかけてひらかれたこの総会についてはきわめて簡単な報道しかなされてない。つまり「1976年人民経済計画について」の討議が行なわれ、「来年度に未緩衝生産高地を占領し

て新たな大建設のための準備事業を全面的に展開することを強調し、「当該の決定が採択された」というだけである。これは恐らく6カ年計画達成後つぎの計画に入るまでの時期を緩衝期として設定し、しかもまだ目標未達成で緩衝期に入らぬ分を「未緩衝」という特殊な用語で表現したのであろう。しかも、ここには次期計画については全くふれられていないところを見ると、次期計画の立案、開始のメドがまだ立っていないものと思われる。

(3) 「三大革命赤旗獲得運動」開始

12月1日に、桂冠近衛二重千里馬というものものしい肩書をもつ剣徳鉦山で従業員決起集會がひらかれた。これは「偉大な首領の呼びかけと党中央の戦闘的アピールにしたがって『思想も、技術も、文化もチュチュの要求通りに!』という革命的スローガンのもとに『三大革命赤旗獲得運動』を力強くくりひろげるためのもの」であった。この運動を簡単に要約すれば、三大革命運動をいっそう展開するための、「大衆的大進軍運動」ということだが、さらに「偉大な首領と栄えある党のまわりに鉄壁のごとく団結して偉大な首領と党中央を政治思想的に、命を賭けて擁護保衛する近衛隊、決死隊、親衛隊、突撃隊にしっかり準備しなければならない」という任務もつけ加わっている。この大会は、「決意文」を採択して、この運動にこぞって決起することを、全国の工場、企業所、農村、文化部門などによびかけ、それに呼応して、全国にこの運動の「炎がもえひろがっている」という報道が次々に発表された。

ただ奇妙なことは、前記党中央委総会の報道では、この運動について全くふれられていないのに、突如として、「偉大な首領金日成同志の呼びかけと党中央の戦闘的アピール」にのっという形でこの運動が開始されたことである。これを額面通り受けとれば、党中央委員会のほかに別個の「党中央」が存在するということにもなりかねない。また、前記のように、この運動に「偉大な首領と党中央を政治思想的に、命を賭して擁護保衛する」任務が課されているというのも奇異である。この二重の問題点を、矛盾なく説明しようとすれば、11月19～21日の党中央委総会で、金日成とその擁護派に対する批判が表面化したため、金

主席派はその意志を貫徹することができなかった。そこで、金主席派は総会後、独自に活動を起こして、大衆的に自派の基礎をつくり出す「三大革命赤旗獲得運動」を三大革命グループを中核に激しく展開しはじめたのだという解釈が成り立つ。このように見るならば、6カ年計画の繰り上げ達成という大変な強行軍と、その後始末をめぐって、上層部で深刻な内部抗争が展開されているという推測も成り立つわけである。

それかあらぬか、金主席の12月に入ってから行動はきわめて不活性化し、ブルガリア人民議会議会代表団(1日)、ルーマニア政府代表団(8日)を接見したのち、25日にサントメ・プリンシペ民主共和国のダ・コスタ大統領夫妻を出迎え、同夜歓迎宴を主催したのち、どこにも登場せず、28日にダ・コスタ大統領夫妻が金主席夫妻のために主催した宴会にも、金聖愛夫人を出席させたのみで、ついに姿を現わさなかった。

こうしたことから、年末以降、ある種の異変が生じつつあるとの観測が、外部世界の専門家のあいだで抱かれるにいたった。

経済建設

この年、6カ年計画の繰り上げ達成の課題に全力が集中されたことは、前項にも概略のべたとおりである。これは、全勤労者の「忠誠の総突撃戦、決死戦」と表現されるものであった。ここでは年内に生じた特徴的な問題点を、いくつか抜き出して、要約的に報告する。

(1) 重大隘路とアンバランスの発生

金主席の「新年の辞」では、本年の基本的課題の第一として「輸送戦線」の問題をとりあげ、「急速に増大する輸送の需要に輸送能力が追いつけずいます。輸送の緊張を決定的に緩和しないかぎりすでに建設した生産施設が威力を十分に発生することも、新しい建設を力強く促すことも、6カ年計画をくりあげて完遂することもできません。全党、全国、全人民がとり組んで輸送の緊張を緩和し、輸送戦線で一大変革をおこさなければなりません」と強く訴えている。またそれにつづけて「基本建設戦線」では「発電所の建設を先行

させる」ことがとりあげられている。

ついで2月28日～3月4日にひらかれた工業部門熱誠者会議における金主席演説は、まず筆頭に「採取工業」の問題をあげ「何よりもまず採取工業に大きな力をふりむける」ことを力説し、「現在ぼう大な規模ですみやかに発展している加工工業に採取工業が先行していません」と深刻な実情をのべている。そして第二番目に「輸送の緊張をほぐす」ことをあげているのであるが、そこでは「輸送の緊張をほぐすためにはなによりもまず鉄道の電化をひきつづきおしすすめることです」とのべ、「鉄道を電化するには、多くの銅が必要です」として、ここでも銅鉱山の増産運動(1人当たり銅を計画以外に毎日1キログラムずつ増産)を訴えているのである。

このことを見てもわかるように、本年の経済建設面では、輸送、電力、金属原料などの面に重大なボトル・ネックが生じ、しかもそれらが、一定の悪循環関係に入りはじめていたことを示している。

これは昨年レポートにもふれたように、74年2月の労働党中央委第5期第8回総会で、6カ年計画の内容を大幅に中途改変し、にわかにな新規建設優先主義にきりかえてやり始めたために、大きな混乱が生じてきたことを表現している。

それだけでなく、前記2演説の中では、生産の「正常化」と「節約」の課題が、強く訴えられはじめている。「冶金工業部門と化学工業部門では、現在の工場、企業所の生産能力を最大限に利用

し、新しく操業する工場、企業所で生産を正常化して(下略)」「(新年の辞)」、「新しく建てられた軽工業工場で生産を正常化して(下略)」(同上)「生産成長の大きな潜在力は設備の利用率を高め、原料と資材を生産に優先させることです。すべての工場、企業所で大安の事業体系の要求どおり企業管理を正規化、規範化して、原料と資材を生産に優先させ、設備の最大の稼働を保障して生産を高い水準で正常化し、現在の設備と資材、労働力でより多く生産しなければなりません」(同上)、「人民経済すべての部門でもっている予備を最大限に動員利用して生産を決定的に増大させなければなりません」(工業大会演説)、「人民経済すべての部門で資材節約運動を強化する必要があります」(同上)などといった部分にそれが見られる。これらは、原料、資材の欠乏のために、生産設備が遊休化する現象が相当起こってきたことをものがたっている。

(2) 1975年度「財政報告」

4月8日に最高人民会議第5期第5回会議で金敬連財政部長が行なった財政報告「1974年国家予算の決算と1975年国家予算について」にはいくつもの問題点があるが、ここでは、主として数字にあらわれた諸点のみを、検討するとどめる。

まず財政規模の面から見ると、74年決算収入は予算を102%超過遂行する好成績であった。これは前年予算より17%、前年決算よりも16.4%増である(第1表参照)。しかし、報告中には、新しく

第1表 財政規模の推移(1970～75年)

(単位 万ウォン)

年次	予算額 (歳出入同額)	対前年増加率 (%)	決 算 額			
			歳入額	対前年増加率 (%)	歳出額	対前年増加率 (%)
1970 (同換算値)	618,662	11.6	623,200 (534,200)	17.2	600,269 (508,070)	18.9
1971 (同換算値)	727,727 (617,220)	17.6	635,735	2.0 (19.0)	630,168	5.0 (24.0)
1972 (同換算値)	737,480	1.3 (19.5)	743,030	16.9	738,861	17.2
1973	854,351	15.8	859,931	15.7	831,391	12.5
1974	980,121	14.7	1,001,525	16.4	967,219	16.3
1975	1,151,720	17.5				

(出所) 各年「財政報告」

(備考) 「換算値」とは、1972年「財政報告」において、1971年度決算以降物価変動を理由とする再計算措置がとられたことによるもの。

着手したばかりの地方予算制が非常に好成績だったため、地方支出をまかなった上で3億2049万ウォンを中央予算に回したと報告されている。これは、国家予算の決算収入が予算を超過遂行した額に当る約2億ウォンをはるかに上まわっている。したがってこの分を除くと、決算は予算を下まわったこととなり、前年決算に対する対比は12.5%増となる。周知の通り、国家財政は全面的に社会主義経営収入に依存しているから、この数字はある程度経済の実勢を反映しているとみてもよい。12.5%というのは、再計算によって不可解となった71年度をのぞき、もっとも低い数値である。

次に、新しい75年度予算で、各部門に対する支出・投資計画をあげているものについて、前年度予算と対比して見たのが第2表である。これを見

第2表 国家財政支出と投資(対前年比%)
(1974~75年)

費 目	1974年度予算	1975年度予算
人民経済支出	—	119
基本建設投資	150	140
運輸部門投資	—	180
採取工業部門投資	160	160
金属工業部門投資	250	膨大
化学工業部門投資	190	230
軽工業部門投資	150	120
農業部門投資	170	140
社会文化施策費	116	118
教育部門支出	114	119
住宅部門支出	180	150

(出所) 1974年度、1975年度「財政報告」

第3表 1975年財政報告における生産達成数字
と生産目標数字

A 74年達成分		B 75年目標分	
品 目	対前年 比(倍)	品 目	対前年 比(倍)
ピナロン混紡地	1.4	化学繊維	1.3
毛織地	2.1	塩化ビニール	1.4
セーター・ジャケット	1.8	工作機械	1.6
はき物	1.2	発電機	3.0
食肉加工品	1.7	電動機	2.0
水 飴	2.9	(出所) 1975年「財政 報告」	
ブドウ糖	3.9		
化学肥料供給量	1.4		
うち磷肥料	1.8		

ると伸び率が前年より上まわっているのは、運輸部門、化学工業部門、教育部門であって、他は減少するか横ばいである。

また、財政報告に例年上げられる品目別の生産達成数字と生産目標数字をまとめて見ると第3表のとおりである。今年度予算では、達成数字は昨年7項目より多い9項目をあげているが、そのうち昨年目標と関連するのは化学肥料(目標1.7倍、達成1.4倍)、磷肥料(目標2.8倍、達成1.8倍)の2品目だけである。この2項目も目標は生産数字であるが達成は農村への供給量という微妙な使いわけがしてあり、目標を下まわっていることをカバーしている。他は全く目標にあげられなかった品目ばかりである。さらに新しい75年度の目標数字は、わずかに5品目(昨年は10品目)しかあげていない。以上のことは、比較検討可能な数的指標を、外部に公表することを極度に警戒する傾向が、この予算でますます強まってきたことを示している。また、同時に、この財政報告における目標設定の中に、多くの具体的建設対象がふくまれているところからすれば、この6カ年計画繰り上げ達成の最終段階において、極端に新規建設に依存する傾向が出てきたと見てよい。その詳細については省略する。

第4表 国防費の割合と金額(1973~75年)

年 次	予 算		決 算	
	財政規模中 の割合(%)	金 額 (万ウォン)	歳出規模中 の割合(%)	金 額 (万ウォン)
1973	15.0	128,153	15.4	128,034
1974	16.0	156,819	16.1	133,854
1975	16.4	188,882		

(出所) 各年「財政報告」

(備考) 金額は、公表された総額とパーセンテージから筆者算出。

なお最後に、国防費についていうと、第4表のとおりになる。財政規模中の割合でいえば前年度予算を0.4%上まわっているにすぎないが、金額で見ると前年度決算を5億5028万ウォン上まわる18億8882万ウォン(41.1%増)となり、国防にかなり重点をおきはじめていたことがうかがわれる。

(3) 6カ年計画の繰り上げ達成過程

年初からはげしくくりひろげられた、6カ年計

面の繰り上げ達成運動は、とくに1月中の成果については続々と報道され、さらに2月11～17日の労働党中央委第5期第10回総会で採択されたスローガンの中にも、168項目中60項目をついやして詳細によびかけられた。さらに、3月20日には、突然、人口1人当り国民所得が1000ドルをこえ、74年の「70日戦闘」期間中の従業員1人当り生産額が9844ウォンに達して6カ年計画水準を上まわったという報道がなされた(「朝鮮中央通信」)。

その直後の3月26日には、江原道の114工場、企業所が6カ年計画を終了したと報道されて、いよいよ繰り上げ達成に向かって具体的に突入する様相を示した。

ところが、その後しばらく経済的成果についての報道はなく、6月14日にいたって労働新聞は、

「みながこぞって自力更生の革命精神を高く発揮し、6カ年計画の高地に勝利の砲声をとどろかせよう」と題する社説を発表した。この社説は「こんにちおり重なる難関を果敢に克服すること」「われわれにまかされた困難でぼう大な革命課題にふさわしく自力更生の革命精神を高く発揮すること」を訴えた深刻な調子のものであり、そのためには「首領のまかせた課題を自力で無条件遂行する絶対性の精神、忠誠の革命観」が必要であり、「無から有を創造」しなければならぬというのである。

このことは、本年前半に急激に共和国の外貨不足、貿易支払遅延問題が国際的に表面化したため、輸入面でデッドロックに乗り上げ、それが6カ年計画遂行上の大難関となったことを示してい

第5表 6カ年計画繰り上げ遂行の内容

	指 標 項 目	中央統計局報道		6カ年計画目標	
		目標遂行率(%)	1970年比(倍)	倍 率	実 数
総 体 指 標	工業総生産額		2.2	2.2	
	生産手段生産		2.3	2.3	
	消費財生産		2.1	2.0	
	工業生産年平均増加速度		(18.4%)	(14.0%)	
	国民所得		1.7	1.8	
重 工 業	電 力	102	1.7	2.1	280億～300億kW/h
	石 炭	101	1.8	1.8	5000万～5300万t
	銑鉄・粒鉄	92	1.7	} 1.8(冶金)	350万～380万t
	鋼 鉄	86	1.5		380万～400万t
	化学肥料	109	2.0	} 2.5(化学)	
	ピナロン	114	3.6		
	塩化ビニール	108	3.3	3.0)	
	機械製作工業		2.4	2.7	
	大型機械		2.2	—	
	工作機械	111	2.4	2.8	
	トラクター	101	8.7	—	2万1000台
	自動車	103	2.4	2.4	
農業機械		3.6	—		
セメント	91	1.7	1.9(建材)	750万～800万t	
軽 工 業	織 物	116	1.8	—	5億～6億m
	下 着 類	105	1.5	1.4	
	セーター・ジャケット	268	5.6	2.1	
	は き 物	115	2.2	—	7000万足
	水 産 物	104	1.5	—	160万～180万t
	食 料 品	102	2.4	—	
	日 用 品	113	2.0	—	

る。

つづいて6月18日の労働新聞がかかげた社説「みなこそって十月の大祭典を偉大な勝利で迎えるための忠誠の大突撃戦を力強く展開しよう」も、「こんご近いうちに今年度経済計画と6カ年計画のすべての基地にかちどきをあげるための闘争は決して容易なことではない」とその困難性を自認しながら、この闘争を「父たる首領の気遣いをやわらげ、首領にもっとも大きな喜びをいだかせさせようとする」念願にもとづき、「帝国主義とその手先たち」に「いま一度致命的な打撃を与える聖なる闘争である」と規定して、はげしく6カ年計画の繰り上げ完遂をよびかけた。その効果あってか、7月以降ぞくぞくと各部門、工場、企業所の6カ年計画繰り上げ完遂が報道されはじめる。部門についてだけ紹介すると下記のとおりである。

7月5日報道 軽工業部門（6月末現在で）

7月23日報道 重機械工業部門

8月21日報道 通信部傘下工場、企業所

“ 陸運総局傘下輸送戦士

このような経過をへて、9月22日中央統計局は、本年8月末現在で、5126の工場、企業所が6カ年計画を繰り上げ完遂し、工業部門では総生産額的に1年4カ月繰り上げ遂行したという報道を行なったわけである。この中央統計局報道にあらわれた数字的部分を、6カ年計画当初目標と対比して見ると、第5表のとおりである。この表で疑問となるのは目標を達成したといわれている「電力」の場合に、目標倍率をかなり下まわっていること、「機械工業」については全体および工作機械において、目標を下まわっていることである。また、鉄鋼部門、セメント部門では目標に達していないことを自認している。

さらに6カ年計画で重工業部門中にはっきり目標数字をあげて示されていた鉱石採掘業（2倍）、船舶工業（5.8倍）についての指摘がまったくなされていない。またこの期間中に、新たに創設される計画であった石油化学工業、合成ゴム工場、アルミニウム工場についても全くふれられていない。

以上のような点から見て、この6カ年計画の繰り上げ達成には多くの疑義が残されているが、数

第6表 6カ年計画中の工業生産額の成長数字

年次	I		II		III	
	各年成長率 (%)	70年比指数	各年成長率 (%)	70年比指数	各年成長率 (%)	70年比指数
1970	—	100.0	—	100.0	—	100.0
1971	17.0	117.0	(16.0)	116.0	18.4	118.4
1972	17.0	136.9	(16.0)	134.6	18.4	140.2
1473	17.0	160.2	19.0	160.0	18.4	166.0
1974	17.2	187.8	17.2	187.5	18.4	196.5
1975	25.0	234.7	25.0	234.4	18.4	232.5

(注) I = 1971~73年の年間の平均成長率が17.0%であったとするもの (1974年「財政報告」)。

II = 1973年の成長率が19.0%で、工業生産額が1.6倍となったという報告から71~72年を逆算したもの (これも1974年「財政報告」)。

III = 年平均増加速度が18.4%だったとするもの (1975年2月2日中央統計局報道)

字的に最も不可解なことは、工業生産の年平均増加速度である。ここでは平均18.4%の高い成長をとげたと報道されているが、これから計算した工業総生産額の対70年比は2.33倍となって、同時に報道された2.2倍を上まわってしまう。また、これまでに公表された各年成長数字は、71年末公表、72年末公表、73年19.0% (同時に71~73年は年平均17%と発表)、74年17.2%、75年(8月末まで)25.0%という数字である。これを計算してみると同じように2.34倍という高い数字になる(第6表)。総体的な計算で、これほど大きな誤差を生ずるのは、どういう理由なのか不可解である。

このほかに、この期間中に建設されたとする建設対象についても、多くの問題が残されているが、ここでは割愛する。

(4) 6カ年計画繰り上げ達成以降の問題

実際内容の点では多大の疑義があるにせよ、とにかく1年4カ月繰り上げ達成という数字をつくり出すために、相当な無理が強行されたであろうことは想像にかたくない。その無理は、この繰り上げ遂行後、ただちに深刻な影響を与え始めているものと見られる。第一には、年央から表面化した貿易支払遅延による外国貿易の停頓である。これは公表資料がないため、正確に金額をつかみえないが、西ドイツ、フランス、北欧諸国、日本等に対して計数億ドルの支払遅延が生じ、すでに西欧諸国は新規貿易に応じない強硬姿勢をとりはじめ

たといわれる。そのために、6カ年計画以降の新計画立案に重大な支障が生ずるにいたった。第二に、わずか8カ月間に対前年比25%増というような、激しい増産運動を展開し、6カ年計画を完遂したにもかかわらず、それが必ずしも6カ年計画で約束したような生活の向上をもたらしていないものと思われる。これは数字にかなりの水増しによる誇示的なものがあると見られるだけに、なおさら際立つであろう。公表数字によっても、たとえば、6カ年計画では肉類加工品生産は5.9倍、野菜加工品生産は14.7倍とされていたのに、今回の達成数字の消費物資供給量では肉類加工品3.6倍、野菜加工品1.6倍とはるかに目標を下まわっている。このことは、今後の労働意欲に重大な影響を与えるものである。そのほか、「突撃戦」型増産運動の生む、全体的なアンバランスと隘路の深刻化、製品品質の低下、などが重なり合って、むしろ6カ年計画完遂以後に共和国の経済建設は未曾有の難関にさしかかったようである。

12月から始まった「三大革命赤旗獲得運動」は、この難関を突破するための新しい大衆動員を企図するものであった。

対外関係

共和国の今年の国際活動は極めて活発であった。特に力を入れたのは、第三世界および非同盟

諸国に対してである。

本年度、正式な外交関係を結んだ国家は、フィジー、ポルトガル、タイ、ケニア、ビルマ、エチオピア、モザンビーク、チュニジア、サントメ・プリンシペ、カボベルデ、シンガポール、コモールの12カ国にのぼっている。うち、この年に新しく独立した国はモザンビーク、サントメ・プリンシペ、カボベルデの4カ国であり、クーデター、政変などによって生まれた新政権はポルトガル、タイ、エチオピアの3カ国である。

また、経済建設に困難を極めていながら、イエメン人民民主共和国に第3州アルカウド油類工場、コンゴ人民共和国にブラザビル総合技術学校、ソマリアにベル・ベラ・セメント工場、モーリタニアにヌアクショット女子・子供服工場などの建設援助を行ない、いくつかの国々および武装闘争団体に軍事援助を行なっているとも伝えられる。

第30回国連総会では、共和国側決議案が初めて、社会主義諸国、第三世界諸国、非同盟諸国等の支持をえて、第一委員会、全体会議を通過した。

このように、政治的には着々と国際的成功を収めたのであるが、6年計画繰り上げ達成をめぐる経済建設上の問題では、むしろ対外信用を急激に失墜しつつある。

重 要 日 誌

1 月

1日 ▶金日成主席「新年の辞」を發表——社会主義大建設の成果をたたえ、とくに大冶金基地の建設を「最大の成果」としてあげる。1975年は党創立30周年の意義深い年であるとして6カ年計画の達成をよびかけ、第一の重点目標として「輸送戦線」、ついで基本建設戦線（発電所先行）、工業戦線、農業戦線、水産戦線の課題を列挙する。また「三大革命」運動の継続を訴え、「全社会をチュチェ思想で一色化する」ことと、「抗日遊撃隊式活動方式を徹底的に具現」することなどを強調。

▶金主席、在日同胞子女への教育援助費と奨学金第57回目（7億345万円）、第58回目（7億5258万4500円）を送り、累計183億5986万8033円に達する。

3日 ▶「労働新聞」社説「今年は党創立30周年にあたる年である。みなこそって10月10日前に6カ年計画の高地占領をめざす総攻撃戦へ！」

4日 ▶「労働新聞」論説「南朝鮮で民主主義的政権をうちたてることは自主的平和統一のためのもっとも効果的な方途」——南朝鮮で朴正熙がいらい一味のファッショ支配を粉碎し、民主主義的政権をうちたてることは、わが国につくりだされた情勢において難局を打開し、自主的平和統一を実現するための必須の要求となると主張。

▶最近朝鮮2.8芸術映画撮影所が天然色劇映画「クムヒとウンヒの運命」を制作したと報道（ふた子の姉妹が南北に別れた悲劇をえがく）。

6日 ▶朝鮮中央通信、クムソン・トラクター工場、スリ自動車総合工場の増産闘争を報道。

7日 ▶降仙鋼鐵戦士らが、全国の工場・企業所に「朝鮮労働党創立忠誠の社会主義競争」をよびかけ、「忠誠のろし」を高々とあげたと報道。

8日 ▶全国農業大会、金主席参席のもとに開会（於、平壤体育館、～1月15日）——楊亨黙「開会の辞」、徐寛熙農業委員長報告「偉大な首領金日成同志の賢明な指導のもとに昨年農業戦線でおさめた大勝利と今年の闘争任務について」（2万5000余人参加）

▶朝鮮・アジア・アフリカ連帯委主催によるアジア・アフリカ・ラテンアメリカ人民との国際連帯週間平壤市大衆集会開催（於、チョンリマ文化会館）

▶リョムン炭鉱、6カ年計画の石炭生産課題を2年くりあげ達成。

▶南北調節委副委員長第9回目接触。北側、調節委改

編を提議し、南中央情報部員をのぞく幹事会議の早期開催を要求し、南朝鮮支配層を糾弾（次回接触を3月14日決定）。

10日 ▶マルタ共和国政府代表団（団長、ドン・ミントフ首相）平壤着（～13日）。

▶金主席、マルタ代表団を接見し、盛大な宴会を催す。

12日 ▶マルタ政府代表団を歓迎する平壤市民大会開催（於、平壤体育館）。

13日 ▶朝鮮・マルタ政府間経済・技術協力に関する合意書調印。

▶金主席、訪朝中のイタリア国際関係研究所書記長ジャンカルコ・エリア・パロリ教授を接見。同書記長は、「朝鮮民主主義人民共和国との友好促進ヨーロッパ委員会」執行委メンバーが、昨年12月18日発表したアピールを伝達。

14日 ▶世界商業銀行代表団（団長、E. P. ゴステフ同銀行総裁）訪朝（～17日）。

15日 ▶金主席、全国農業大会最終日にあたり「すべての力を穀物800万トン生産高地占領のために」という綱領的演説を行なう。同大会閉幕。

▶南朝鮮の言論機関に対する朴正熙がいらい一味のファッショ的弾圧を糾弾する平壤市記者・編集員大会開催（於、平壤大劇場）。

▶昨年農業生産に寄与した郡・協同農場ならびに国营農・牧場に荣誉称号を与え、農業部門活動家を表彰する集会開催（於、平壤体育館）。

16日 ▶「金日成青年榮譽賞」授与式開催（於、平壤学生少年宮殿）。

17日 ▶朝鮮社会主義労働青年同盟29周年記念中央報告会開催（於、人民文化宮殿）——リ・ヨンボク委員長報告「青年たちは偉大な首領が創始した青年運動に関する独創的な思想と理論で徹底的に武装し、それを輝かしく具現しよう」

18日 ▶「祖国の平和統一のためにたたかう朝鮮人民との国際連帯会議」、イラクの首都バグダッドで開幕。42カ国の代表団ら参加（～19日）。

▶朝・キューバ科学院間、1975～76年度科学協力に関する議定書調印（於、ハバナ）。

19日 ▶金主席と金一政務院総理、中国第4期全国人民代表大会第1回会議の成功に対して祝電を送る。

21日 ▶ソ連政府代表団（団長、イ・テ・ノビコフ副首

相) 朝・ソ経済科学技術協議委員会参加のため平壤着(～28日)。

▶人民共和国貿易代表部をペルーの首都リマに開設。

▶「労働新聞」論説「分裂主義者の売国反民族のたわ言」——朴大統領の年頭記者会見内容を糾弾し、とくにその「不可侵条約」提案を攻撃。

▶朝鮮・リビア・アラブ共和国政府間貿易協定締結(於、タラブラス)。

▶シリア・アラブ共和国軍事代表団(団長、ヒクマト・シエハビ総参謀長)平壤着。呉振宇人民軍総参謀長と会見(～28日)。

▶政府代表団(団長、鄭準基)ウガンダに出発(～エチオピアも訪問し、2月4日帰国)。

▶朝ソ政府間経済・科学委員会第12国会議開催(於、平壤、～28日)、ソ連側団長ノビコフ副首相、朝鮮側代表崔載羽副総理。

22日▶「光復の百里の道」50周年記念中央報告会開催(於、平壤体育館)。

23日▶「光復の百里の道」踏査行軍出発の集い開催(於、ポピョン)、行軍参加者1万余人。

▶政府代表団(団長、鄭準基副総理)ウガンダでアミン大統領と会見(～エチオピアを経て2月4日帰国)。

24日▶最高人民会議代表団(団長、許貞淑常設会議副議長)シリア・アラブへ出発。

▶第7回南北赤十字会談実務会議開催(於、板門店)、北側は本会談を平壤でひらくことを再主張、南における自由な法律的条件と社会的環境の保障を先行せよと強調(次回を2月28日に合意)。

25日▶南北調節委平壤側チョ・ミョンイル副委員長、ソウル側に電話通知文を送り、南側の対北誹謗宣伝を糾弾、さる23日の前線対南放送は当然の回答と主張。

▶政府貿易代表団(団長、ハン・スギル貿易部副部長)アルバニアとルーマニアへ出発。

26日▶朝・パキスタン回教共和国政府間の航空運輸に関する協定調印(於、平壤)。

27日▶金主席、シリア・アラブ共和国軍事代表団を接見。

28日▶政府経済代表団(団長、金敬連財政部長)、セネガルへ出発(～シエラレオーネを経て、3月15日帰国)。

▶フィンランド共和国政府貿易代表団(団長、タネリ・ケッコネン外務省特別顧問)平壤着。

▶人民軍、人民警備隊各区分隊は人民軍創建27周年をひかえ、多彩な行事を活発に行なっていると報道。

▶ドイツ民主共和国政府貿易代表団(団長、ゲハルト・ニチケ対外貿易次官)平壤着。

29日▶「労働新聞」社説「チュチェ朝鮮の英雄的気概をはせた『70日戦闘速度』でいっそう力強く前進しよう」

30日▶「労働新聞」社説「党創立30周年を勝利者の大祭典として迎えよう」

31日▶「労働新聞」論説「南朝鮮人民の愛国闘争を支持声援することは同じ民族として当然の義務」

2 月

1日▶「労働新聞」社説『「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」』党の革命的スローガンをさらに高くかかげよう——偉大な首領への限りない忠誠心、ひたすら首領のために、首領がしめした革命偉業の遂行のために生き、学び、たたかうことを強調。

▶朝鮮・アルバニア政府間1975年度商品相互供給・支協定調印(於、チラナ)。

2日▶祖国平和統一委員会声明「われわれは主人米日の脚本にしたがいがい『国民投票』を是が非でも強行しようと狂奔している朴一味の犯罪行為をこみあげる民族的怒りでだんこ糾弾する」

▶朝鮮・民主ドイツ政府間1975年度商品相互供給議定書調印(於、平壤)。

3日▶金主席、発展途上国の原料に関する会議に祝電(同会議は4日からセネガルの首都イカールで開催)。

4日▶インド共和国政府貿易代表団(団長、P・エン・ネビル商業省副書記)平壤着。

▶党代表団(団長、金英男党中央委政治委候補、秘書)キューバへ出発。

▶セネガル首都ダカールで「発展途上国の原料に関する会議」開催(5日より人民共和国政府代表団団長金敬連財政部長、参加)。

5日▶「光復の百里の道」踏査行軍参加者歓迎、平壤市青少年学生大会開催(於、金日成広場)。首都の青少年学生4万余人参加し、1万余人の行軍参加者を迎える。

▶「人民軍創建27周年記念映画上映週間」各地ではじまる。

6日▶金一政務院総理、訪朝中のフィンランド政府貿易代表団(団長、ケッコネン外務省特別顧問)と会見。

▶朝鮮・インド共和国間1975年度商品流通に関する議定書調印(於、平壤)。

▶「光復の百里の道」50周年記念踏査行軍に参加した全国社労青員と少年団員の忠誠の大会開催(於、平壤マンスデの丘、平壤体育館)。

7日▶人民軍創建27周年慶祝中央報告大会開催(於、平壤人民文化宮殿)、呉振宇人民軍総参謀長報告。

▶「労働新聞」池炳学上将の論説「首領の指導をうける英雄的な朝鮮人民軍は必勝不敗である」を掲載。

▶朝鮮中央通信社・朝鮮中央放送委員会声明「南朝鮮がいらいは『反共』をもってしても誰も欺くことはできず、己れが直面している破局的危機からぬけることはできない」

8日 ▶金主席、人民軍創建27周年にさいし人民軍356部隊を訪問。主席の派遣した人民代表団、人民軍陸海空軍各区分隊を訪問。

10日 ▶祖国統一民主主義戦線中央委声明「われわれは『国民投票』に反対する南朝鮮の各階層人民の正義の闘争を積極的に支援することを当然の義務とみなし、それに熱烈な支持と声援をおくる」

11日 ▶共和国外交部声明「朝鮮人民は兄弟のカンボジア人民の正義の偉業を全力を尽してひきつづき積極的に支援するであろう」

▶政府軍事代表団（団長、パン・チョルガプ海軍司令官・中将）ユーゴスラビアへ出発（～2月27日）。

▶労働党中央委第5期第10回総会開催（～17日）——議案①偉大な首領金日成同志が示した思想・技術・文化の三大革命課題遂行のための指導活動状況について、②朝鮮労働党創立30周年にあたっての党中央委員会のスローガンについて。

12日 ▶「労働新聞」社説「すべての活動家は十月の大祭典を輝かせるための総突撃戦を覇気にあふれて指揮しよう」

▶朝鮮・ザンビア政府間貿易協定締結（於、ルサカ）。

13日 ▶「労働新聞」論説「全党が金日成同志の革命思想、チュチェ思想で武装することは革命偉業の終局的勝利のための確固たる裏付けである」

▶「民主朝鮮」紙「共和国地方主権構成法に関する法規解説(上)」を掲載。（～17日(下)）

14日 ▶祖国統一民主主義戦線中央委声明「朴正熙一味は『国民投票』の全面的破綻を認め、南朝鮮人民の要求通り『政権』の座から退くべきである」

▶「労働新聞」論説「党の統一思想体系を確固とうちたてることは全社会を首領のチュチェ思想で一色化するための根本要求」

16日 ▶金主席、三大革命展示館を参観。

▶「労働新聞」論評でイギリス駆逐艦の南朝鮮鎮海港寄港（13日）を糾弾。

▶金主席、文学芸術部門活動家に共和国人民俳優（2人）、功勳芸術家（4人）、功勳俳優（10人）称号を授与することに關する中央人民委政令と、映画部門活動家に勳章およびメダル（596人）を授与することに關する中央人民委政令を公布。

▶政府代表団（チョン・ミョンス外交部副部長）、ガンビアへ出発（主席特使としてセネガル、ザイールも訪問し、3月25日に帰国）。

17日 ▶南北調節委共和国側チョ・ミョンイル副委員長、ソウル側に電話通知文——漂流した共和国巡察船にたいする南朝鮮側の横暴非道かつ挑発的な海賊行為を非難。*

▶「労働新聞」編集局論説「偉大な首領に永遠に忠誠をつくすことはわが人民のもっとも気高い革命的風格である」

▶政府経済代表団（団長、崔載羽副総理）、ユーゴスラビアとマルタへ出発。（～3月4日）

18日 ▶軍事停戦委朝中側首席委員、南側首席委員に抗議通知文——去る2月15日の巡察船に対する砲撃問題。

19日 ▶南北調節委共和国側副委員長、ソウル側副委員長に、巡察船問題で再度電話通知文。

20日 ▶「労働新聞」はじめ平壤各紙、労働党創立30周年にちなんだ党中央委のスローガンを大々的に掲載。

▶金主席特使として康良煜副主席、ネパール王国ビレンドラ王戴冠式に出発（～25日）。

21日 ▶「労働新聞」論評で、「韓日大陸棚共同開発協定」の国会批准を急ぐ日本反動の犯罪政策を糾弾。

▶ルワンダ共和国政府代表団（団長、ルワガフィリタ・ピエール・セレステン青年相）平壤着（～25日）。

▶「労働新聞」社説「チョンリマ進軍の新しい段階をきりひらいた『70日戦闘速度』でひた走ろう」

▶軍事停戦委第359回会議開催。共和国側巡察船問題で謝罪・返還を要求。

22日 ▶金主席、訪朝中のルワンダ共和国政府代表団を接見。

▶「民主朝鮮」紙論説「わが国の選挙制度はもっとも民主主義的で人民的な選挙制度である」

▶「労働新聞」社説「思想・技術・文化の三大革命の旗を高くかかげて社会主義建設のすべての戦線に新たな転換を起こそう」

▶朝鮮・ユーゴスラビア政府間経済・科学技術協議会創設に關する協定調印（於、ベオグラード）。

▶朝鮮・ルーマニア政府間1975年度商品相互供給・支払いに關する議定書調印（於、ブカレスト）。

25日 ▶鄭準基副総理、日朝貿易会相川理一郎専務理事と会見。

26日 ▶朝鮮・マルタ共和国政府間経済・技術協力協定調印（於、ラ・バレッタ）。

▶豊津半島西側の公海上で操業中の新義州水産事業所所属漁船12隻が、南朝鮮海軍軍艦に攻撃さる（27日報道）。

▶南北調節委共和国側副委員長，ソウル側副委員長に放送で通知文，挑発行為の中止を要求。

▶政府経済代表团（団長，李応求対外経済事業部副部長）ザイール共和国へ出発。

27日 ▶市（区域），郡人民会議代議員選挙施行，外国旅行中の者をのぞき有権者の100パーセント投票に参加，100パーセント賛成投票。2万3883人（うち女子6206人）を選挙。

▶朝鮮中央通信社声明，漁船に対する南朝鮮側武力攻撃を糾弾。

28日 ▶工業部門熱誠者会議，金主席参席下で開会（於平壤，1万6000余人参加，～3月4日）——延亨黙「開会の辞」，李根模党政治委員・副総理報告「朝鮮労働党創立30周年を勝利者の大祭典として迎えるために『70日戦闘速度』で6カ年計画の高峰をめざして総進軍，総突撃しよう」

▶外交部スポークスマン声明，アメリカ帝国主義と南朝鮮かいらい一味は共和国への敵対的挑発行為をただちに中止すべきであると警告。

▶南北調節委共和国側副委員長，ソウル側副委員長に電話通知文。謝罪，返還，首謀者処罰を要求。

▶南北赤十字第8回実務会議開催（於，板門店）——共和国側，①巡察船・漁船問題の処罰，謝罪，返還，②反共謀略策動中止，③弾圧行為中止と全政治犯釈放，を主張。

▶ブルンジ共和国政府貿易代表团，平壤着（～3月7日）。

3 月

1日 ▶共和国漁船団に対する南朝鮮かいらい一味の海賊行為を糾弾する平壤市大衆大会開催（於，人民文化宮殿），洪基文祖国平和統一委員長演説——以後各地で大衆大会。

2日 ▶モザンビーク解放戦線・過渡政府代表团（団長 サモラ・マシエル解放戦線議長）平壤着（～7日）。

▶金主席，モザンビーク代表团を接見。

▶労働党中央委と共和国人民委，モザンビーク代表团を招宴，金主席参席，金東奎副主席あいさつ。

3日 ▶金主席，石油輸出機構首脳会議（於，アルジェ）に祝電。

▶軍事停戦委第360回会議開催（於，板門店）。

4日 ▶工業部門熱誠者会議閉幕。金主席の会期中の演説「三大革命を力強く展開して社会主義建設をいっそう促進しよう」

▶金主席，工業部門の労働者，技術者，事務員，三大革命グループ員に，金メダルおよび国旗勲章第1級（287

人），国旗勲章第1級（7256人），労働勲章（135人），国旗勲章第2級（1万3448人），国旗勲章第3級（4万6890人）など（計15万1532人）をおくる。

5日 ▶金主席・マシエル・モザンビーク解放戦線議長会談。

6日 ▶モザンビーク解放戦線・政府代表团歓迎平壤市民大会開催（於，平壤体育館）。

▶朝鮮・ハンガリー政府間1975～76年度文化交流計画書調印（於，ブダペスト）。

7日 ▶スリランカ代表团（団長，アヌラ・バンダラナイケ自由青年同盟委員長・政府計画省顧問）平壤着（～15日）。

▶モザンビーク代表团の朝鮮訪問と関連した共同コミュニケーション発表。

▶3.8国際婦人デー65周年記念中央報告会開催（於，平壤人民文化宮殿），金聖愛女同委員長記念報告。

9日 ▶外交部声明，カンボジア人民の決意と立場を支持する。

▶政府代表团（団長，朴成哲副総理）イランに出発（～20日）。

10日 ▶外交部声明，アメリカ帝国主義者は南朝鮮において武力増強と戦争策動を直ちに中止し，自己の侵略武力を撤去すべきである（3月6日のアメリカ国防省の駐韓米軍4000人増強発表に関連して）。

▶「労働新聞」社説「偉大な首領のよびかけにこたえて思想・技術・文化の三つの赤旗を高くかかげ6カ年計画の生産高地へと総突進しよう」（工業部門熱誠者会議の成果的な終了に関連して）。

▶チェコスロバキア政府代表团（団長，フランチシェク・ハモウズ副首相）平壤着（～15日）。

▶「金日成同志革命思想学習班」第1回全国学習競技大会開催（於，平壤人民文化宮殿，～13日）。

11日 ▶金主席，スリランカ代表团を接見。

▶最高人民会議代表团（団長，許貞淑常設会議副議長）エジプト・アラブ共和国へ出発（～22日）。

▶労働党代表团（団長，柳章植党中央委秘書）イタリアへ出発（イタリア共産党第14回大会出席のため，～26日）。

14日 ▶金一総理，チェコスロバキア政府代表团と会見。

▶労働党代表团（団長，徐哲党中央委政治委員会委員）ハンガリーへ出発（ハンガリー社会主義労働党第11回大会出席のため，～25日）。

▶南北調節委副委員長間第10回接触，チョ・ミョンイル共和国側副委員長は①武力挑発行為と「反共」騒動の中止と，②「6.23宣言」の取り消し，民族分裂鼓吹行為

の中止を提案。

▶記者同盟中央委声明, 南朝鮮言論人と人民の闘争を支持, 声援。

▶スリランカ代表团歓迎平壤市大衆集会開催(於, 人民文化宮殿)。

▶デンマーク政府貿易代表团(団長, ウィリアム・チュネ・アンデルセン貿易局長)平壤着(〜21日)。

▶朝鮮・チェコスロバキア政府間経済・科学技術協力協定調印(於, 平壤)。

16日▶「労働新聞」論評で, 反ファッショ民主化闘争の先頭に立ってたたかうよう南朝鮮労働者によびかける。

17日▶「労働新聞」論評で, 南朝鮮にふたたび燃え上がった南朝鮮人民と青年学生の愛国闘争を全幅的に支持, 声援。

18日▶議会グループ代表团(団長, 黄長燁議会グループ委員長・最高人民会議常設会議議長), インドはじめ東南アジア諸国親善訪問のために出発(〜4月3日)。

19日▶金主席, 訪朝中のフランス共産党書記長特使(ジャン・カナパ国際部長, 3月18日〜21日)を接見。

20日▶軍事停戦委第361回会議開催(於, 板門店)。

▶許淡外交部長, デンマーク王国政府貿易代表团と会談。

▶朝鮮中央通信社報道, 同日付アメリカ軍発表の「トンネル発見事件」は「おそまつなベテン劇であり, 全くのデマである」

▶朝鮮中央通信報道, 共和国北半部の国民所得は1人当り1000ドルを越えた(1970年の国民所得は1946年の9.4倍, 昨年の「70日戦闘」期間の従業員1人当り生産額は9844ウォンの水準に達した)。

21日▶カンボジア民族統一戦線結成とカンボジア民族解放人民武装勢力創建5周年記念平壤市大衆集会開催(於, 人民文化宮殿)。

22日▶金主席, 3月30日工場におもむき, 100トン級大型自動車を見学。

▶「労働新聞」評論員論評, 第2の「トンネル事件」でつち上げは「己れの新たな戦争策動を何とかしておおいかく」そうとしたもの。

▶赤衛隊事業部代表团, シリアへ出発。

23日▶非同盟諸国調整委員会(於, ハバナ, 3月17日より4日間), 共和国を非同盟諸国に参加させるための賛成勧告案を満場一致で採択。朝鮮統一問題に言及した宣言採択(南からの米軍撤退, 統一あるいは連邦制実施後の国連加盟)。

▶中央人民委, 平壤第一師範大学を「金亨稷師範」大学にする政令公布。

▶平壤各紙, 金亨稷先生の朝鮮国民会創建58周年にさいし記念論説。

▶朝鮮国民会創建58周年記念全国陸上大会開催(於, 牡丹峰競技場, …〜26日)。

▶朝鮮・エジプト政府間1975年度商品流通に関する議定書調印(於, カイロ)。

24日▶「労働新聞」南朝鮮青年学生と人民の3.24闘争11周年にさいし編集局論説「すべての民主勢力の団結した力で『維新』独裁の牙城をだんこ粉碎せよ」

▶「労働新聞」社説「反帝自主の闘争で団結を強化するという新興勢力人民の一致した意思のあらわれ」(非同盟諸国調整委に関連)。

25日▶議会グループ代表团(団長, 鄭準基副総理), IPU第116回会議(於, スリランカ)参加のため出発(〜4月11日)。

▶朝鮮・ブルガリア政府間1975〜76年度文化交流計画書調印(於, 平壤)。

26日▶南北赤十字第9回実務会議開催(於, 板門店)。

▶平壤市とロメ市(トゴ共和国)間に友好関係を結ぶ集会開催(於, 平壤千里馬文化会館)。

▶江原道で110余の工場・企業所が6カ年計画を終えたと報道。

▶「労働新聞」社説「抗日遊撃隊式学習気風を全国にうちたてよう」

27日▶金主席生誕63周年を迎え, 金日成元帥にささげる忠誠の手紙を伝達する駅伝競走各地で始まる(50余万人の青少年学生参加予定)。

▶最近, 総天然色記録映画「新しい朝鮮」(1, 2部)制作と報道。

28日▶「学びの百里の道」52周年記念全国人民学校少年団委員長踏査行軍隊, 万景台に到着, 盛大な歓迎に平壤にぎわう。

29日▶外交部声明, 南ベトナム共和臨時政府の3月21日付声明を支持し, 南ベトナム人民とその武装勢力の勝利を祝う。

▶朝鮮中央通信, 全国農村里の85%以上にバスが入るようになったと報道。

30日▶全国革命史跡部門活動者大会開催(於, 平壤人民文化宮殿), 柳章植党中央委政治委候補・秘書報告。

▶第173次在日朝鮮公民帰国船清津港着。歓迎する清津市大衆集会開催。

▶朝鮮・シリア政府間1975年度商品流通に関する議定書調印(於, ダマスカス)。

31日▶革命史跡事業で模範を示した活動家(1302人)に勲章およびメダルを授与。

▶軍事停戦委朝中側首席委員金ブンソプ少将, 敵側首

席委員に抗議の通知文、「トンネル事件」はあさはかな茶番劇。

4 月

1日 ▶「労働新聞」論評で「韓日大陸棚共同開発協定」の国会批准を急ぐ日本反動を糾弾。

▶スウェーデン王国政府代表団（団長、ケイ・ビヨルク駐朝特命全権大使）、平壤着（～6日）。

▶日朝文化交流協会代表団（団長、梶谷善久常任理事）平壤着。

3日 ▶平壤でスウェーデン工業展開幕（～12日）。

4日 ▶日本の学者栗木安延一行平壤着（～18日）。

5日 ▶金主席生誕63周年記念映画上映旬間開始。

▶「労働新聞」社説「偉大なチュチェの旗じるしのもとに南朝鮮人民はかたく団結して反帝反ファシヨ闘争で輝かしい勝利をかちとろう」——南朝鮮の革命隊伍を「永久不滅のチュチェ思想で一色化するために最大の力を傾けなければならない」と強調。

6日 ▶「マンガョンデ（万景台）賞」体育競技大会開幕（於、平壤牡丹峰競技場）。

▶国際民法法律家協会第10回大会（於、アルジェ、4月2～6日）、「朝鮮に関する決議」採択。

7日 ▶「労働新聞」社説、カンボジア国家元首・民族統一戦線議長シアヌーク親王の4月4日付声明を全幅的に支持。

▶金主席生誕63周年在日朝鮮人祝賀団（団長、リ・ジンギョ朝総連副議長）平壤着（～5月22日）。

▶第5次在日同胞商工人祖国訪問団（オ・スンナム総連大阪府西淀川商工会理事長）平壤着（～5月22日）。

▶金主席、訪朝中のアンゴラ全面独立民族同盟代表団（団長、サムエル・シワレ同盟中央委政治委員・武装力総司令官）を接見。

▶偉大な首領の永久不滅の革命思想チュチェ思想をいっそう深く学習するための全国社会科学部門活動家の研究討論会開催（於、平壤人民文化宮殿、～12日）。

8日 ▶最高人民会議第5期第5回会議開幕——議題①1974年度国家予算の執行に対する決算と75年度国家予算について（金敬連財政部長報告）、②全般的11年制義務教育に関する法令の執行総括について（金錫基教育委員長報告）（～10日）。

9日 ▶ユーゴスラビア、ザグレブ市に共和国総領事館開設。

10日 ▶金主席生誕63周年祝賀在日朝鮮人歌舞団（団長リョ・ウンサン朝総連文化局部長）平壤着。

▶朴成哲副総理、日朝文化交流協会代表団と会見。

▶最高人民会議第5期第5回会議閉幕。

▶政府代表団・ラオス民族政治諮問評議会代表団間会談。

▶日本青年チュチェ思想研究会代表団（団長、尾上健一研究会責任者）平壤着（～5月14日）。

12日 ▶金主席、国連駐在ダオメー共和国常任代表ティアマウ・アジバド夫妻を接見。

▶金主席、訪朝中のラオス民族政治諮問評議会代表団（団長、シスマン・シサルアムサク副議長）を接見。

▶金主席、訪朝中のパナマ・朝鮮友好文化協会一行（マリオ・アウグスト・ロドリゲス書記長ほか）を接見。

▶金主席、シリア留学生宿所を訪問。

▶在日朝鮮人民法律家協会代表団平壤着（～5月22日）。

▶「労働新聞」社説「党創立30周年祭典を6カ年計画の完遂で輝かせ、いっそう大きな勝利をかちとるために今年度の予算を徹底的に執行しよう」

13日 ▶金主席、訪朝中のコスタリカ朝鮮友好文化協会代表団（団長、ホセ・フランシスコ・ヤギラル・ブルカデリ委員長）を接見——この時の質問に対する金主席回答は、4月28日コスタリカ新聞「エル・プエブロ」に掲載された。朝鮮中央通信は5月22日に報道。

14日 ▶フィジー政府と外交関係樹立および大使級外交代表交換に関する共同コミュニケ調印（於、オーストラリア首都キャンベラ）。

15日 ▶金主席生誕63周年で統一革命党中央委祝賀文をささげる——「わたしたちは、首領が自らきりひらいた聖なる革命偉業のためならば、この身がぐだけて粉になるようなことがあっても、それ以上の栄光がないという鉄のような信念に燃えています」

▶金日成元帥に全国青少年の名でささげる忠誠の手紙伝達集会開催（於、赤旗万景台革命学院運動場）。

▶金日成元帥生誕63周年記念朝鮮少年団全国連合団体大会挙行（於、赤旗万景台革命学院運動場）。

▶朝鮮・ポルトガル共和国間外交関係樹立および外交代表部の交換に関する共同コミュニケ調印（於、モスクワ）。

16日 ▶金主席が率いる党・政府代表団近く中国を公式訪問と発表。

▶金主席、在日同胞に59回目の教育援助費・奨学金10億6012万2500円を送付（累計194億1999万533円）。

▶金主席、訪朝中の日本学者栗木安延一行を接見。

▶金主席、訪朝中のインド週刊紙「ブリッツ」責任主筆 R. K. カランジアを接見。

17日 ▶金主席が率いる党・政府代表団、中国訪問に出發——団員金東奎党中央委政治委員・秘書・共和国副主席、呉振宇党中央委政治委員・秘書・人民軍総参謀長、

朴成哲党中央委政治委員・共和国政務院副総理，全文燮党中央委政治委員候補・人民軍上将，許淡党中央委員・共和国政務院副総理・外交部長，桂応泰党中央委員・共和国対外経済事業部長，呉極烈党中央委員・人民軍党軍司令官，玄峻極党中央委候補・共和国特命全権大使，見送り，金一政務院総理，康良煜副主席など。

18日 ▶金主席一行北京着，鄧小平党副主席・副総理，江青党中央委政治局委員，姚文元党中央委政治局委員，陳錫聯党中央委政治局委員・副総理，紀登奎党中央委政治局委員，副総理ら出迎え。

▶金主席，毛沢東と会見，朱徳全国人民代表大会常務委員長と会見。

▶中国共産党中央委，中国国務院，金主席一行の歓迎宴開催——金主席演説「南朝鮮で革命が起これば，われわれは同じ民族として，それを座視していることはできず，南朝鮮人民を積極的に支持するであります。もし敵が無謀にも戦争をひき起こすならば，われわれはだんこ戦争でこたえ，侵略者を徹底的に掃滅するであります。この戦争でわれわれが失うものは軍事境界線であり，得るものは祖国の統一であります」

▶南朝鮮人民の4月蜂起15周年平壤市記念報告会開催（於，人民文化宮殿）。

19日 ▶プノンペン完全解放を祝う平壤市大衆集会挙行（於，牡丹峰青年公園野外劇場），2万余人参集，李勇武人民軍総政治局局長演説。

▶朝鮮中国党・政府代表団間会談。

▶金主席，病院の周恩来総理を訪問。

▶金主席一行，プノンペン解放慶祝北京市民大会に参加。

▶「労働新聞」社説「南朝鮮青年学生と人民は，力強い抗争の火で軍事ファッショ独裁の牙城を焼きはらおう」

20日 ▶「労働新聞」社説「血潮で結ばれた朝中両国人民間の戦闘的友好は永遠に花咲くであろう」

▶朝中党・政府代表団間第2回会談。

21日 ▶「労働新聞」社説「英雄的なカンボジア人民の偉大な勝利を熱烈に祝う」

▶フィンランド国会代表団（団長，ライネン国会議長）歓迎平壤市民集会開催（於，人民文化宮殿）。

▶金主席，鄧小平副総理と会見。

22日 ▶金主席一行，中国の地方参観に出発（鄧小平，喬冠華ら同行）——南京着。

▶政府経済代表団（団長，李泰白貿易部副部長）モロッコへ出発。

▶「労働新聞」社説「レーニンの革命業績は末永く輝いている」（レーニン生誕105周年にさいし）——「首領の

共産主義革命理論は，チュチェ思想にもとづいて共産主義革命理論を全一的に完成した偉大な思想である」

23日 ▶政府代表団（団長，鄭準基副総理），トーゴへ出発（～5月8日）。

▶朝鮮・トーゴ間文化協力に関する協定調印（於，ロメ）。

24日 ▶金主席一行，北京帰着。

25日 ▶朝中党・政府代表団間第3回会談。

▶金主席一行，北京で盛大な宴会開催。

26日 ▶朝中共同コミュニケ調印（28日発表）。

▶金主席一行，特別列車で北京出発。

27日 ▶金主席一行，特別列車で平壤帰着。

▶トーゴ独立15周年平壤市大衆集会開催（於，人民文化宮殿）。

29日 ▶「労働新聞」社説「朝中人民間に血潮で結ばれた戦闘的な友好の威力を示威」

▶日朝国交正常化国民会議代表団（団長，三宅正一参議院議員・日本社会党顧問）平壤着（5月9日）。

30日 ▶少年代表団（団長，チ・ジュリヨン社労青副委員長）アルゼンチンへ出発。

▶政府代表団（団長，リ・ギソン対外経済事業部副部長）キューバへ出発。

5月

1日 ▶「労働新聞」メデー記念社説「偉大な首領の賢明な指導ののっとなって前進するわが労働者階級と人民の革命偉業は必勝不敗である」

2日 ▶金主席と金一総理，民主ベトナム党・政府指導者に，南ベトナム全域解放・完全勝利に関連して祝電を送る。南ベトナム民族解放戦線・共和臨時革命政府指導者にも。

▶偉大な祖国戦争でのソ連人民の勝利30周年にさいして軍人集会開催（於，金日成軍事総合大学）。

▶朝鮮・モロッコ王国政府間貿易協定締結（於，ラバト）。

3日 ▶「労働新聞」社説「英雄的な闘争の立派な結実，全ベトナム人民の偉大な勝利」

▶労働党代表団（団長，金煥中央委員・部長）ギニア・ビサウへ出発（～ガボン共和国も訪問し，6月14日帰国）。

▶政府代表団（団長，康良煜副主席），シアヌーク親王母堂葬儀に参加のため中国へ出発（～6日）。

▶ベトナム人民の偉大な勝利を慶祝する平壤市大衆集会開催（於，牡丹峰青年公園野外劇場），2万人参集，李勇武人民軍総政治局局長演説。

4日 ▶朝鮮・ベトナム民主共和国1975～76年度科学技

術協力議定書調印（於、平壤）。

5日 ▶金主席、在日朝鮮人祝賀団を接見。

▶記録映画「農村テーゼ実現の途上に色どられた実の親の愛情」「全世界に光輝く偉大な農村テーゼ」制作と報道。

▶「労働新聞」論説で祖国光復会創建39周年を記念、「全国、全民族を祖国光復の聖戦へとよびおこした偉大な革命的旗じるし」

6日 ▶党・政府代表団（団長、徐哲党中央委政治委員）、対独戦勝30周年記念行事参加のためソ連へ出発（～13日）。

▶セネガル共和国政府代表団（団長、ルイ・アレクサンドレン工業開発相）平壤着（～13日）。

▶エジプト・アラブ共和国民族評議会代表団（団長、モハメド・アブデル・ハテム民族評議会総監督）平壤着（～13日）。

7日 ▶金主席、金鍾泰電気機関車工場におもむき、2500馬力ジーゼル機関車クムソン号を参観。

▶世界気象機構第7回会議（於、ジュネーブ）、共和国の正式加盟決定（賛成96、反対0、棄権17）。

8日「労働新聞」論評で、日本三木首相の国会発言（5月6日）を「侵略に血道をあげる日本軍国主義者の破廉恥な暴言」と糾弾。

▶タイ王国との外交関係樹立・外交代表部の交換に関する共同声明発表（於、バンコク）。

▶金主席、訪朝中の日朝国交正常化国民会議代表団（団長、三宅正一）を接見。

▶南北赤十字第10回実務会議開催（於、板門店）。

▶偉大な祖国戦争でのソ連人民の勝利30周年平壤市記念集会開催（於、人民文化宮殿）。

9日 ▶マンスデ芸術歌舞団、ユーゴスラビアへ出発（～5月27日帰国）。

▶アルジェリア政府代表団（団長、モハメド・タエビ・ラルビ革命評議員、農業・土地改革相、土地革命全国委員長）平壤着（～14日）。

10日 ▶金主席、エジプト民族評議会代表団を接見。

11日 ▶金主席、訪朝中のシエラレオネ友好代表団（団長、ジョセフ・アルマミ・コンテ副鉉業相）を接見。

▶金主席、訪朝中のシエラレオネ新聞「サンデー・フラッシュ」紙アレン主筆夫妻を接見。

12日 ▶金主席、セネガル政府代表団を接見。

▶金主席、アルジェリア政府代表団を接見。

▶アルジェリア政府代表団歓迎平壤大衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

▶ケニア共和国と外交関係樹立および外交代表交換に関する共同コミニケ発表（於、ニューヨーク）。

13日 ▶日朝文化交流協会高木健夫理事長一行平壤着（～5月31日）。

▶金主席・シエラレオネ共和国情報省代表団（団長、アフメド・バラ・ムサ・カマラ情報放送相）を接見。

▶シエラレオネ友好代表団歓迎平壤市大衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

14日 ▶イランのアシュラビ・パーレビ公主殿下一行平壤着。平壤各紙が歓迎論説（～19日）。

▶金主席、イランのパーレビ公主殿下を接見。

15日 ▶日本学術代表団（団長、越智勇一日本学術会議会長）平壤着（～28日）。

▶「労働新聞」南朝鮮の緊急措置第9号公布を論評「南朝鮮青年学生はファッションの鉄鎖をたちきる決戦の先頭に勇敢になつてであろう」。

16日 ▶ビルマ連邦社会主義共和国との外交関係樹立（19日に報道）。

▶「労働新聞」論評、「南朝鮮かいらいは最後の時をきざんでいる」

▶「労働新聞」評論員論評「アメリカ帝国主義は核兵器による脅威をもってしても決して朝鮮人民を驚かすことはできない」

▶在日朝総連結成20周年記念映画上映句間開幕式（於、平壤人民文化宮殿）、記録映画「父たる首領の万年長寿を60万は祈ります」を観覧。

17日 ▶金主席、日朝文化交流協会高木理事長一行を接見。

18日 ▶外交部スポークスマン声明、カンボジアに対する米帝の海賊行為（マヤゲス号事件）を糾弾。

▶イラン公主殿下歓迎平壤市婦人集会開催（於、人民文化宮殿）、金聖愛女同委員長演説。

▶イラン公主殿下歓迎平壤市民大会開催（於、平壤体育館）。

▶「労働新聞」論説「偉大なチュチェ思想で総連を一色化する闘争で積みあげられた高貴な業績」

19日 ▶カンボジアのシアヌーク親王夫妻一行平壤着。金主席夫妻ら出迎え。平壤各紙歓迎社説掲載。

▶朴成哲副総理、第1回中国友好参観団（団長、覃応機中国共産党広西壮族自治区委員会書記・広西壮族自治区革命委員会副主任）と会見。

▶金主席、シリア・バース少年先鋒隊指導活動家代表団を接見。

▶「労働新聞」論評、17日の非武装地帯における南朝鮮かいらい軍の武力挑発行為を糾弾、同様挑発行為は4月1日から5月12日までに2570件に達したと指摘。

20日 ▶金主席、シアヌーク親王と会談。夜、盛大な宴会を開催（於、万寿台議事堂）。

▶バングラデシュ初代駐朝大使クワジャ・モハメド・カイセル平壤着。

▶政府代表团(団長, 金学燮通信部長), 通信協定締結のためにソ連に出発(～6月3日)。

▶中央人民委政令「総連結成20周年記念メダルを制定することについて」公布。同じく中央人民委政令で, 朝鮮通信社, 朝鮮大学校に金日成勲章を授与, 総連傘下教育活動家・体育人に共和国功勲教育称号, 功勲体育人称号を, 傘下11事業体・学校に国旗勲章第1級を授与し, 活動家と愛國的商人・熱誠同胞(計1万0209人)に勲章・メダルを授与する政令を公布。

21日 ▶金主席と金聖愛夫人, 党・政府代表团を率い, ルーマニア訪問に出発(朝鮮中央通信23日に報道), 代表团員は, 金東奎党中央委政治委員・秘書・共和国副主席, 呉振宇党中央委政治委員・秘書・人民軍総謀長(夫妻), 柳章植党中央委政治委員候補・秘書, 許淡党中央委員・政務院副総理兼外交部長, 鄭松南政務院対外経済事業部長ら——21日中国新疆ウイグル自治区ウルムチに到着し, サイフジン中国共産党中央委候補, 党ウイグル自治区委員会第一書記, 全国人民代表大会常務委副委員長, 自治委革命委主任, 韓念竜副外相らの出迎えを受け, 22日午前中まで滞る。

22日 ▶金主席一行, ルーマニア, ブカレスト空港に到着し, チャウシェスク大統領・党書記長らの盛大な歓迎を受ける。

▶金主席, ルーマニアの歓迎宴で演説「朝鮮人民とルーマニア人民は帝国主義に反対し社会主義偉業の勝利をめざして共同でたたかう階級的兄弟であり, 久しい前からあつきずなを結んだ」

▶総連結成20周年に際して首領に感謝をささげる在日朝鮮人代表团(団長, 朴在魯総連副議長)平壤着。(～6月29日元山から帰日)

▶中央労働者会館開館式挙行(平壤市大同江畔), 金一総理参席, 総建坪1万4000余平方メートル。

23日 ▶金主席, チャウシェスク大統領会談。

▶トゴ大統領特使クァオビ・ベニ・ジョンソン公報・出版・ラジオ・テレビ・通信相ら平壤着(～6月13日)。

▶スーダン社会主義連合代表团(団長, ファイサル・モハメド・アブデル・ラフマン中央委員, 大統領官房国務相)平壤着。

▶朝鮮・ポーランド間ラジオ・テレビ放送分野協力協定調印。(於, 平壤)。

▶第18次在日同胞祖国訪問団, 平壤着。

24日 ▶ルーマニア朝鮮友好大衆大会盛大に挙行(於, ブカレスト), 金主席演説「朝鮮人民は, こんごも帝国

主義に反対し社会主義偉業の終局的勝利を成就するためにつねに兄弟的ルーマニア人民とたたかう手をたずさえてたたかうであろう」

▶金主席, 朝総連結成20周年で韓徳鉄議長に祝電——総連をチュチェ思想で一色化する課題を強調。

▶朝総連結成20周年記念中央報告大会開催(於, 人民文化宮殿), 朴成哲副総理報告。

▶マンステ芸術団ソ連へ出発(～一部6月15日帰国, 一部モスクワよりオーストラリアへ直行)。

25日 ▶金主席, チャウシェスク書記長と談話(於, ブカレスト市郊外スナコブ)。

▶金主席, 在日同胞に第60回教育援助費・奨学金6億826万5000円をおくったと報道。

▶金主席, チト一大統領生誕83周年を祝って, 駐朝ユーゴスラビア大使館に花籠を伝達。

26日 ▶朝鮮・ルーマニア間友好・協力条約締結(於, ブカレスト)。

▶朝鮮の党・政府代表团のルーマニア訪問と関連した共同コミュニケ(28日発表)。

▶金主席一行, ルーマニア訪問を終えアルジェリアに出発。アルジェ到着をブーメジエン議長夫妻ら出迎え。

▶ブーメジエン議長, 金主席一行歓迎宴を開催——金主席あいさつ「われわれ両国人民間の兄弟的友好関係は, 両国が堅持している自主路線の共通性によって, 日ましに大きな生命力を発揮している」

▶金主席, ブーメジエン議長会談。

▶ウガンダ政府軍事代表团(団長, ムスタファ・アドリン軍参謀長・少将)平壤着(～6月3日)。

▶朝鮮・ルーマニア間1976～80年商品流通・支払いに関する協定調印(於, ブカレスト)。

27日 ▶軍事停戦委第362回会議開催。

▶金主席, ブーメジエン議長会談。

▶シリア・パース少年先鋒隊指導活動家代表团歓迎平壤市学生少年大会開催(於, 平壤体育館)。

28日 ▶金主席歓迎アルジェ市民大会, 金主席, 演説で非同盟政策支持を強調。

▶駐朝ラオス王国初代大使平壤着。

▶駐朝スイス連邦初代大使平壤着。

29日 ▶金主席・ブーメジエン議長第2回会談。

▶南北調節委共和国側副委員長, ソウル側副委員長に電話通知文——副委員長間の接触を当分延期するか, 対話の雰囲気がつくられた条件のもと, 7月に接触実現を期待する。

▶金主席, アルジェリア政府機関紙「アル・ムジャーヒド」記者の質問に回答(30日全文掲載)。

▶ドイツ民主共和国政府代表团(団長, ハンス・ライ

ヒェルト副首相), 平壤着。

▶ソ連共産党活動家代表団(団長, アレクセイ・クレメンチェビッチ・チョルヌイ党中央委員, ハバロフスク辺江党委第一書記), 平壤着。

30日 ▶金主席一行, アルジェリアからモーリタニア回教共和国へ出発。ヌアクショット到着をダグダ大統領ら出迎え。金主席到着声明。

▶朝鮮・ソ連間通信協定調印(於, モスクワ)。

31日 ▶金主席, ダグダ大統領と会談。

▶金主席歓迎ヌアクショット市民大会開催——金主席演説で「朝鮮とモーリタニアはともに第三世界に属する国」と指摘。

▶ウガンダ軍事代表団, アミン大統領の金主席あて親書を康副主席に伝達。

▶金主席, ヌアクショットでフランス・プレス通信者ジャン・クリストフ・ミッテラン記者の質問に回答。

▶貿易銀行代表団, シリア・アブラ共和国訪問に出発(～7月11日)。

6 月

1日 ▶金主席一行, アルジェに到着。

▶朝鮮・モーリタニア間共同コミュニケ調印(於, ヌアクショット)。

▶金主席一行, ブルガリアの首都ソフィア着, ジフコフ議長ら出迎え。

2日 ▶朝鮮・アルジェリア間共同コミュニケ調印(於アルジェ)。

▶南北調節委共和国側スポークスマン声明——5月31日の第11回副委員長接触をめぐる南朝鮮側からの非難を糾弾。

▶朝鮮・ブルガリア党・政府代表団間会談。

3日 ▶金主席歓迎デブニヤ市民大会開催——金主席演説で社会主義建設の上での協力を強調。

4日 ▶金主席・ジフコフ第一書記会談。

▶ガボン共和国代表団(団長, マルテン・レカンガル財務・協力担当国務書記) 平壤着。

5日 ▶朝鮮・ブルガリア党・政府代表団間会談。

▶金主席歓迎ソフィア市民大会開催。

▶朝鮮党・政府代表団のブルガリア訪問に関する共同コミュニケ調印(於, ソフィア)。

▶金主席一行, ユーゴスラビア訪問, リュブリアナ到着をチトー大統領夫妻ら出迎え。金主席声明発表。チトー大統領と会見。

▶金主席, 金一総理, 南ベトナム民族解放戦線, 共和臨時革命政府指導者に, 共和臨時革命政府樹立6周年にさいし祝電。

▶朝鮮・民主ドイツ間経済・科学技術協力議定書調印(於, 平壤)。

▶朝鮮・エジプト間航空運輸に関する協定締結(於, 平壤)。

▶朝鮮・エチオピア臨時軍事政府間の大使級外交関係樹立に関する共同コミュニケ発表(於, アジスアベバ)。

6日 ▶金主席, チトー大統領会談。

▶金主席夫妻歓迎昼食会で, 金主席演説し, 非同盟政策の重要性を指摘。

7日 ▶朝鮮・ユーゴスラビア党・政府代表団間会談開催。

8日 ▶社会主義諸国マラソン大会平壤で開催(朝鮮, ドイツ, ルーマニア, ブルガリア, ハンガリー, ベトナム, チェコスロバキア, キューバ, ポーランド, ソ連の10カ国参加)。

9日 ▶南北赤十字会談共和国代表団長, 南朝鮮側に電話通知文——6月12日予定の実務会議を7月下旬に延期。

▶金主席観迎リュブリャーナ市民大会開催。

▶党・政府代表団のユーゴスラビア訪問と関連した共同コミュニケ調印(於, ブロド)。金主席一行ユーゴスラビアを出発し帰国の途へ。

10日 ▶金主席一行平壤帰着。(途中, 中国ウルムチ市に立ち寄る)50余万市民熱狂的歓迎。

▶プエルトリコ社会党代表団(団長, フロレンシオ・メルセッド政治委員・アメリカ常任代表) 平壤着(～18日)。

11日 ▶共和国代表団(団長, 許貞淑最高人民会議副議長) 国際婦人世界大会(於, メキシコ)に参加のため出発(～7月10日)。

▶軍事停戦委第363回会議開催, 6月2日の非武装地帯銃撃はじめ, 多数の軍事挑発を非難。

12日 ▶金主席, トーゴ共和国大統領特使(ジョンソン公報・出版・ラジオ・テレビ・通信相)一行を接見。

▶全国の郡・区域で田植え完了と報道。

▶オーストラリアのドナルド・ロバート・ウィルシー外相一行平壤着(～15日)。

13日 ▶許淡外交部長, オーストラリアのウィルシー外相と会談(～14日)。

▶不屈の共産主義者金哲柱同志(金主席の次弟)逝去40周年平壤市追慕会挙行——楊亨燮党中央委政治委員・秘書「追慕の辞」をのべる。

14日「労働新聞」社説「みながこぞって自力更生の革命精神を高く發揮して6カ年計画の高地に勝利の砲声をとどろかせよう」——6カ年計画の高地くり上げ遂行のために, 自力更生の革命精神が必要と強調。

▶マンステ芸術団、オーストラリアのパースに到着
(～7月18日帰国)。

15日▶「労働新聞」論評員論評、最近の日本の三木首相、宮沢外相の発言(新平和維持機構、南北朝鮮同時承認など)をゆるし難い挑戦と非難。

16日▶祖国平和統一委、朝鮮平和擁護全国民族委、朝鮮民主法律家協会、朝鮮記者団同盟中央会等6団体「南朝鮮かいらい」の犯罪行為を告発する告訴状発表。

17日▶党・政府代表団(団長、孔鎮泰政務院副総理)モザンビーク独立革命記念行事参加のため出発(～マダガスカル、ザイル、カメルーン、チャド、ガーナ、リベリア、エチオピアをへて9月2日帰国)。

▶コンゴ労働党代表団(団長、ボングアンデ、エミール・オレリエン中央委組織・行政担当書記)平壤着(～24日)。

18日▶政府貿易代表団(団長、ハン・スギル貿易部副部長)ザイル共和国へ出発(～7月1日)。

▶「労働新聞」社説「みなこぞって十月の大祭典を偉大な勝利で迎えるための忠誠の総突撃戦を力強く展開しよう」

19日▶朝鮮・ベトナム民主共和国間経済援助協定調印(於、平壤)。

21日▶インドネシア共和国外務省代表団(団長、アスハリ・ダヌディジョ外務省書記長)平壤着(～24日)。

▶「労働新聞」編集局論説「朝鮮で激化している緊張状態に対する責任はすべてアメリカ帝国主義者とその手先にある」

22日▶「労働新聞」社説「米帝の指図のもとに強行している南朝鮮かいらいの売国反逆的犯罪行為を粉砕しよう」——「韓日協定」の10年間を総括糾弾。

▶平壤各紙、シュレジンジャー米国防長官発言を糾弾。

23日▶「労働新聞」論説で、米帝の沖繩軍事基地化を糾弾。

▶「労働新聞」社説「祖国統一の5大方針を実現して国の自主的平和統一を成就しよう」

24日▶金主席、総連結成20周年にさいして首領に感謝をささげる在日朝鮮人民代表団(団長、朴在魯副議長)一行を接見。

▶外交部スポークスマン声明、米帝の新戦争挑発策動と、核「恐喝」政策を糾弾。

▶朝鮮・パキスタン間航空運輸協定調印(於、平壤)。

▶朝鮮にパレスチナ解放機構代表部を開設するのと関連し、同代表部宴会開催。

25日▶「反米闘争デー」平壤市民群衆大会(於、金日成広場)、20余万人参集。柳章植党中央委政治候補・秘

書演説。

▶「労働新聞」社説「アメリカ帝国主義者は無分別に狂奔せず南朝鮮から直ちに撤退すべきである」

27日▶金主席、祖国訪問中の総連各代表団を接見。

▶教育援助費、奨学金の送金に感謝する在日朝鮮人民代表団(ファン・ビョンテ総連中央常任政治局副局長)平壤着。

▶新浦造船所で3750トン級トロール船「パンリョンサン」号進水を報道。

28日▶段栗鉱山(鉄鉱石)に4600メートルの大型長距離ベルトコンベア工事完工と報道。

30日▶軍事停戦委第364回会議開催——非武装地帯南側の要塞化作業を非難。

7月

2日▶南の超音速戦闘機、開城市パンムン郡上空に侵入。

3日▶南北調節委共和国側共同委員長(金英柱)、7.4南北共同声明3周年にさいし声明発表。

▶金主席、訪朝中のザイル全国総合大学代表団を接見。

5日▶朝鮮革命軍結成45周年中央記念講演会開催。

▶大安電機工場(大型電気機械生産基地)6カ年計画を完遂と報道。

▶軽工業部門で6カ年計画を6月末現在で101パーセントにくりあげ完遂と報道。

6日▶「労働新聞」評論員論評、朴大統領の7月4日付「特別講話」を糾弾。

7日▶イラク政府代表団(団長、タハ・ムヒディン・マルーフ副大統領)平壤着(～10日)。

▶朝鮮、イラク政府代表団間会談。

8日▶金主席、イラク政府代表団を接見。

▶政府代表団(団長、朴成哲副総理)エジプト・アラブ共和国に出発(～エチオピア、ヨルダン、リビア、アラブ、チュニジアを訪問し8月17日帰国)。

▶第19次在日同胞祖国訪問団、平壤着。

▶日本社会党朝鮮問題特別委代表団(団長、楯兼次郎委員長・衆議院議員)平壤着(～15日)。

▶政府代表団(団長、金錫基教育委員長)、モーリシャスへ出発(～モロッコ、ウガンダ、マラウイ、ボツワナをへて8月26日帰国)。

9日▶イラク政府代表団歓迎平壤市民大会開催(於、人民文化宮殿)。

10日▶社会主義諸国青少年親善国際サッカー競技大会開幕(～20日)——朝鮮、ドイツ、ルーマニア、ブルガリア、ハンガリー、チェコスロバキア、キューバ、ポーラ

ンド、ソ連の9カ国参加。

▶「労働新聞」論評で、日本三木首相発言（8日の日韓「安全」の結びつきに関する）を「根も葉もない侵略の論理」と非難。

▶シアヌーク親王、朝鮮滞留と関連して友好の集いを催す。許淡外交部長ら招かる。

▶イラク政府代表団の訪朝と関連した共同コミュニケ発表（於、平壤）。

11日 ▶平壤各紙、朝中友好・協力・相互援助条約締結14周年を記念する論説を掲載。

▶「キューバ人民との連帯月間」設定開幕（～8月10日）。

▶政府代表団（団長、金敬連財政部長）クウェートへ出発（～7月26日）。

▶セネガル共和国軍事代表団（団長、イドリサ・パール民族軍総参謀長、大佐）、平壤着（～18日）。

12日 ▶政府代表団（団長、チョン・ミョンス外交部副部長）クウェートへ出発（～ウガンダ、レバノン、カタール、パーレン、アラブ首長国連邦、キプロスをへて8月26日帰国）。

▶軍事停戦委第365回会議開催——6月30日の警備区域内衝突事件の責任を追及。

▶共和国の援助によるコンゴ総合技術学校竣工式挙行（於、ブラザビル）。

13日 ▶金主席、日本社会党朝鮮問題特別委代表団を接見。

▶「労働新聞」論評で日本防衛庁の「最近の韓平島の情勢」を「さらけだされた海外侵略の野望」と糾弾。

14日 ▶南北調節委共和国側副委員長、ソウル側副委員長に電話文を送る——会谈再開の条件について。

▶2万トン級貨物船「大同化」号進水（於、キム・ドンソクさんが働く造船所）。

15日 ▶日韓科学技術協力委代表団（団長、桜田一郎委員長）平壤着（～22日）。

16日 ▶チュニジア共和国と外交関係樹立に関する共同報道発表（於、チュニス）。

17日 ▶金主席、セネガル軍事代表団を接見。

▶インドネシア国民協議会代表団（団長、イスナエニ副議長）平壤着（～22日）。

▶国際電気通信連合、通信投票（3月17日～7月17日）の結果、共和国の加盟を決定（賛104、反3、棄10）。

18日 ▶許淡外交部長、ユーゴスラビアを親善訪問（7月14日出発～21日まで滞在、～マルタ、インド、スリランカ、マレーシア、インドネシアを訪問し8月14日帰国）。

19日 ▶各大家団体共同名義で、告訴状「全世界人民に

告ぐ、南朝鮮で強行したアメリカ帝国主義侵略軍の蛮行について」を発表。

▶朝鮮、モザンビーク政府間経済・技術協力に関する議定書調印（於、ロレンソマルケス）。

20日 ▶金主席特使楊亨燮中央人民委員・国家検閲委員長・党中央委秘書ビルマへ出発（～バングラデシュ、ネパール、アフガニスタンをへて8月14日帰国）。

▶善天堡のろし賞体育競技大会、恵山市で開幕。

21日 ▶南北赤十字実務者会議開催（於、板門店）。

▶金主席、インドネシア人民代表会議代表団を接見。

22日 ▶日本自民党有志議員団（団長、田村元衆院議員）平壤着（～28日）。

▶モロッコ進歩・社会主義党書記長アリ・ヤタ平壤着（～29日）。

▶金策製鉄連合企業所の4号コークス炉完工、操業開始。

23日 ▶パレスチナ民族解放運動代表団（団長、アブ・ジハド中央委員、革命軍副総司令官）平壤着（～29日）。

▶「労働新聞」論評「帝国主義の手先に下す突然の措置」、第6回回教国外相会議が国連からイスラエルを追放することに関して採択した措置を全幅的に支持。

▶重機械工業局傘下の機械工場、6カ年計画を完遂と報道（1970年の1.7倍、掘削機1.8倍、対象設備1.5倍、大型エンジン15倍）。

▶金東奎副主席、モロッコ進歩・社会主義党書記長と会谈（～24日）。

24日 ▶政府経済代表団ネパールに出発。

25日 ▶甲山鉱山（非鉄金属）今年度計画を5カ月くりあげ完遂。

▶最近、朝鮮芸術映画撮影所「めぐみ深い陽光はここにも」を制作（在日朝鮮連青年教主の活動をえがく）。

26日 ▶金主席、第12回アフリカ統一機構国家・政府首脳会議に祝電。

▶金主席の帰還報告（党中央委政治委員会と中央人民委員会における）にもとづく中央講演報告開催——金東奎副主席講演。

27日 ▶金主席、自由民主党有志議員団を接見。

▶パレスチナ民族解放運動代表団を歓迎する平壤市民大会開催（於、人民文化宮殿）。

▶政府代表団（団長、康良煥副主席）シエラレオネに出発（～オートボルタ、ニジェール、ダオメーをへて8月24日帰国）。

▶人民共和国代表団（団長、柳章植）、パレスチナ民族解放運動代表団と会谈。

▶「労働新聞」社説「偉大な首領の賢明な指導のもとにすすむ朝鮮人民の革命偉業は必勝不敗である」

28日 ▶金主席、モロッコ進歩・社会主義党書記長を接見。

▶金主席、パレスチナ民族解放運動代表団を接見。

29日 ▶「労働新聞」論説「南朝鮮がいらい一味は反帝自主の道に進む第三世界人民と非同盟諸国の奸悪な敵である」

▶全国東医学部門活動家会議開催(～31日)。

30日 ▶軍事停戦委第366回会議開催——米軍側の核作戦体制を暴露断罪。

31日 ▶朝鮮・マリ共和国間、1975～76年度文化交流計画書調印(於、パマコ)。

8月

1日 ▶剣徳鉦山(非鉄金属)6カ年計画を超過遂行と報道。

2日 ▶「労働新聞」論説「南朝鮮がいらい一味はアラブ人民の敵としての凶悪な正体をおおいかくすことはできない」

5日 ▶外交部スポークスマン声明——南朝鮮当局者の「国連加盟申請書」提出(7月30日)を糾弾。

7日 ▶「労働新聞」社説「全朝鮮人民は南朝鮮がいらい一味が強行している犯罪的な『国連加盟』策動を厳しく糾弾する」

8日 ▶35カ国、第30回国連総会に「朝鮮で停戦を強固な平和に転換させ、朝鮮の自主的平和統一を促進するうえに有利な条件をつくるために」という議案とそれに伴う決議案を共同提案。

▶中国芸術団、平壤大劇場で初公演。

▶中国芸術団歓迎平壤市群衆集会開催(於、平壤大劇場)、金仲麟党中央委政治委員・秘書、韓益洙中央委政治委員・秘書ら参加。

9日 ▶興南肥料連合企業所6カ年計画完遂と報道。

▶サントメ・プリンシペ民主共和国と外交関係樹立に関する共同コミュニケ発表(於、サントメ)。

10日 ▶第174次帰国船万景峰号、清津港着。

11日 ▶共和国政府声明「今年の国連総会では必ず朝鮮において停戦を強固な平和に転換させ、朝鮮の自主的平和統一に有利な条件をつくる肯定的な措置がとられなければならない」

12日 ▶リョンソン機械工場(大型機械生産基地の一つ)、大型水力タービンを製作。

▶リビアとセネガル、国連加盟35カ国提案決議案の共同発起国に参加(37カ国となる)。

14日 ▶「労働新聞」論評で、ソウルで開かれた在外国民統一会議を糾弾。

▶祖国解放30周年記念平壤市講演会開催(於、万寿台

議事堂)、尹基福同志演説「偉大な首領金日成同志は祖国解放の恩人であり革命と建設の英才である」。

▶統一革命党中央委、南朝鮮人民に送る檄文「民衆に檄する」を発表——金日成主席を統一の広場に高く仰ぎいただいて最上、最大の栄光をささげる感激のその日を作り上げるために革命闘争に決然と決起することをよびかける。

15日 ▶8.15節30周年に際し、金主席と金一総理、ソ連の党・政府指導者と祝電を交換。

▶祖国解放30周年にさいし、平壤各紙社説を掲載。「労働新聞」社説「祖国を解放した偉大なチュチェの旗をかかげ国の統一偉業を力づくよくりよせよう」

▶祖国解放30周年清津市群衆集会開催(於、清津市競技場)8万余人参加、金東奎副主席報告。

▶ビルマ連邦社会主義共和国代表団(団長、フラ・ボン外相)、平壤着(～19日)。

16日 ▶共和国人民代表団(団長、チョン・ムンウク人民軍中將)、アルジェリア在郷軍人節20周年行事参加のため出発(～9月2日)。

17日 ▶金主席、忠誠の自転車行進在日朝鮮青年代表団を接見、綱領的な教えを与える。

▶外交部、第30回国連総会で朝鮮問題が討議されるのと関連してメモランダム発表。

18日 ▶金主席、ビルマ代表団を接見。

19日 ▶カンボジア民族統一戦線、カンボジア王国民族連合政府代表団(団長、ベン・ヌート統一戦線中央委政治局委員長・首相、キュー・サムファン第一副首相・人民武装勢力総司令官)平壤着(～22日)。

▶オートボルタ共和国サイエ・ゼルボ外相一行、平壤着(～22日)。

▶金主席、カンボジア民族統一戦線・王国民族連合政府代表団を接見。

20日 ▶金城トラクター工場、6カ年計画を完遂と報道。

▶シアヌーク・カンボジア国家元首・民族統一戦線議長、金主席のために盛大な宴会開催。

▶党・政府代表団、カンボジア民族統一戦線・王国民族連合政府代表団と会談。

▶2.8ピナロン連合企業所、6カ年計画を完遂と報道。

21日 ▶金主席、オートボルタ外相一行を接見。

▶通信部傘下の工場・企業所および陸運総局傘下の輸送戦士、6カ年計画を完遂と報道。

22日 ▶シアヌーク親王一行、ベン・ヌート、キュー・サムファンらと共に特別列車で平壤を出発。

▶共和国政府代表団とカンボジア代表団間の共同コミ

ユニケ発表。

▶第12回南北赤十字実務会議開催。

▶人民共和国代表団（団長、許談外交部長）、非同盟諸国外相会議参加のためリマ到着。

24日 ▶金主席、非同盟国家外相会議（於、ペルー共和国リマ）に祝電。

▶最近、カボベルデ共和国と大使級外交関係樹立の共同コミュニケ発表（於、ブラリア）と報道。

25日 ▶平壤総合紡績工場、18日現在で今年度計画（対昨年比1.5倍）を完遂（6カ年計画はすでに完遂）。

▶非同盟諸国外相会議、共和国の加盟を満場一致可決（韓国の加盟申請否決）。

▶「労働新聞」論説「統一革命党の指導と影響のもとに前進する。南朝鮮人民の革命的偉業は必勝不敗である」

26日 ▶日本、共同通信社猪又久夫編集局長一行、平壤着（～6月2日）。

27日 ▶議会グループ代表団（団長、洪基文最高人民会議常設会議副議長）、列国議会同盟第62回総会（於、ロンドン）参加のため出発（～9月16日）。

▶平壤曲芸団、中国訪問に出発（～10月8日）。

▶在日朝総連活動家祖国訪問団、万景峰号で清津港着（28日平壤着）。

28日 ▶「わが党自主路線の輝かしい勝利、朝鮮革命の国際的連帯を誇示した大きな出来事」——非同盟運動への正式参加に関連。

29日 ▶エジプト・アラブ共和国人民議会代表団（団長ハフェズ・アリ・パダウイ前議長）平壤着。

▶阿吾地化学工場、6カ年計画完遂と報道。

30日 ▶政府経済代表団（団長、リ・ギソン対外経済事業部副部長）フィンランドへ出発。

31日 ▶金主席、共同通信社編集局長一行を接見。

9 月

1日 ▶全般的11年制義務教育へ完全移行する新学年度始業式。

▶金主席、平壤市チャンジョン人民学校を現地指導。

2日 ▶正体不明の船舶、鴨緑江河ロミン島近くの領海を侵犯、海岸警備船が追跡、連行（日本の漁船松生丸とわかる）。

▶政府貿易代表団（団長、ハン・スギル貿易部副部長）アルジェリアへ出発（～13日帰国）。

3日 ▶軍事停戦委第367回会議開催。

4日 ▶平壤火力発電所、8月27日現在で6カ年計画を完遂と報道。

▶ザンビア共和国・政府代表団（団長、アレクサン

ダー・グレイ・ジュール統一民族独立党書記長）平壤着（～12日）。

5日 ▶金主席、エジプト人民議会代表団を接見。

▶共和国創建27周年祝賀在日朝鮮人代表団（団長、カン・テクジュン組織局局長）（～10月2日）。

▶共和国代表団（団長、リ・ヨンチャン対外経済事業部副部長）、発展途上国の技術交流に関する第1回会議（於、ユーゴスラビア）参加のため出発（～19日帰国）。

▶アルジェリア政府代表団（団長、アフメド・ベンシェリフ革命評議会メンバー、憲兵司令官）平壤着（～10日）。

6日 ▶ギニア・ビサウ共和国政府代表団（団長、アデリノ・ヌネス・コレリア青年体育担当國務委員）平壤着（～12日）。

7日 ▶アルジェリア政府代表団歓迎平壤市群衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

▶ラオス（8月29日）、オートボルタ（6月1日）、ガーナ（6月2日）が国連決議案共同発起国に参加し、共同発起国数は40カ国となったと報道。

8日 ▶金主席、韓徳鉄議長を団長とする在日朝総連代表団（同日、特別機で平壤着、～10月2日）を接見。

▶人民共和国創建27周年記念中央報告大会開催（於、人民文化大宮殿）、金東奎副主席記念報告。

▶創建27周年にさいし、中国の党・政府指導者（毛沢東、朱徳、周恩来）から祝電（ソ連、ルーマニア、ブルガリアなど各国も）。

9日 ▶金主席、ザンビア党・政府代表団を接見。

▶金主席、アルジェリア政府代表団を接見。

▶金主席、共和国創建27周年慶祝宴開催（於、人民文化宮殿）、金一総理演説。

10日 ▶朝鮮中央通信社報道、わが国領海に不法侵入した日本船舶「松生丸」とその乗組員の送還について。

▶朝鮮赤十字会中央委、日本赤十字社に「松生丸」とその船員送還に関連し電文を送る（死者1人に2万ドルの弔慰金）。

▶金主席、中国芸術団メンバーを接見。

11日 ▶ザンビア党・政府代表団歓迎平壤市群衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

▶「松生丸」船員ら記者会見、田川船長、領海侵犯を認め、不詳事の責任は自分にあると述べる。

12日 ▶ルワンダ大統領特使、ヌセ・カリジェ・アロイス外相一行平壤着（～16日）。

15日 ▶「労働新聞」論説「敬愛する首領金日成同志は偉大な革命実践でチュチェ時代を輝かせる革命と建設の英才である」

▶金主席、ルワンダ特使一行を接見。

▶金主席、アルジェリア軍事代表団（団長、ムスニ・ベルカセム人民軍空軍司令官・少佐）を接見。

16日 ▶韓徳銖議長を団長とする総連代表団歓迎平壤市大衆集会開催（於、平壤体育館）。

▶第30回国連総会閉幕。

17日 ▶国連総会一般委、42カ国共同提起議案を議題として採択することを勧告と決定（賛17、反0）。

18日 ▶平壤各紙、第8回韓日閣僚会議の犯罪的内幕を糾弾。

19日 ▶全国各地で群衆大会を開き、「忠誠の手紙」伝達リレーを平壤に送り出していると報道。

▶国連総会本会議、42カ国共同議案を満場一致で議題に採択。

21日 ▶中国共産党代表団（団長、張春橋党中央委政治局常務委員）平壤着（～27日）。

▶中国共産党代表団歓迎宴（於、人民文化宮殿）、楊亨燮演説。

22日 ▶6カ年計画をくり上げ完遂したという中央統計局報道発表——8月末現在で5126の工場・企業所が計画完遂、これにより6カ年計画は期限前に完遂。

▶金主席、大赦実施に関する中央人民委政令を公布、即日実施。

23日 ▶労働党中央委、中央人民委、政務院共同名義で、6カ年計画をくりあげ完遂した労働者・農民・全勤労者に「祝賀文」をおくる。

▶全国各地の工場、企業所、協同農場、機関で一斉に「忠誠の決意集会」開催（「祝賀文」の特別放送伝達をうける）。

24日 ▶「労働新聞」社説「偉大な勝利、歴史的出来事」

▶金主席、中国共産党代表団を接見。

25日 ▶金主席、張春橋中国共産党代表団団長と会見。

26日 ▶金主席、韓徳銖総連議長を接見。

▶「労働新聞」社説「党の戦闘的なアピールにのっとり勝利者の氣勢も高く新たな高峯をめざして総進軍しよう」

▶中国共産党代表団歓迎平壤市群衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

27日「労働新聞」評論員論評、キッシンジャー國務長官演説を糾弾。

29日 ▶「労働新聞」社説「労働党員は創立30周年を迎えて革命的な党の党員となった栄誉をいっそう輝かせよう」

30日 ▶「労働新聞」評論員論評、国連総会におけるフランス修正案の反動的本質を暴露。

▶中国政府代表団（団長、葉飛交通相）平壤着（～10

月8日）。

▶国連総会第一委、共和国代表の招請を決定。

10月

1日 ▶中華人民共和国展覧会、平壤で開幕（～20日）、中朝友好、農業、軽工業、重工業の4部門にわかれる。

3日 ▶日本「読売新聞」記者代表団（団長、佃有社会部次長）平壤着（～24日）。

4日 ▶「労働新聞」論説「思想、技術、文化の三大革命を力強くくりひろげ全社会のチュチュ思想化をさらに促そう」

5日 ▶党創立30周年慶祝体育種目別選手権大会、労働者体育競技大会開幕（於、東平壤競技場）（～11月1日）。

▶「学生節」13周年記念中央報告会開催、南朝鮮学生青年に送る手紙採択。

7日 ▶トーゴ人民連合代表団（団長、ヤヤ・マール民族教育相）平壤着。

▶ウガンダ政府代表団（団長、K. M. ケレバ保健相）平壤着（～14日）。

▶ガイアナ人民民族大会党代表団（団長、B・ラムセルフ党委員長・国会事業相）平壤着（～14日）。

▶キューバ共産党代表団（団長、ギリエルモ・ガルシア・プリエン政治局員・副首相）平壤着（～14日）。

▶ルーマニア国家評議会副議長エミル・ボブ夫妻、平壤着（～16日）。

▶スペイン共産党代表団（団長、サンチアゴ・カリリヨ書記長）平壤着（～12日）。

▶金主席参席のもと2.8文化会館開館式挙行（人民軍軍人が首領と党にささげる贈物）。

8日 ▶金主席、スペイン共産党代表団を接見。

9日 ▶金主席参席のもと労働党創立30周年記念大会開催（代表9000人参加）、金主席報告「朝鮮労働党創立30周年に際して」——①自主、独立、社会主義建設のための朝鮮労働党の闘争、②三大革命をさらに力強くおし進めよう、③祖国の自主的平和統一をかちとろう、④自主性を擁護する世界人民と団結しよう。

▶日本社会党代表団（団長、赤松勇衆議院議員）平壤着（～14日）。

10日 ▶金主席、ウガンダ政府代表団を接見、祖国訪問の総連労代表団を接見。

▶統一革命党中央委、金主席に捧げる祝賀文をよせる。

▶金主席、党創立30周年慶祝宴を催す（於、人民文化宮殿）、金主席演説。

▶モザンビーク解放戦線代表団（団長、ジョアキン・

ムンヘベ中央委員)平壤着(～14日)。

▶全朝鮮人民の「忠誠の手紙」贈呈式とマスゲーム「偉大なチュチェの旗にしたがって」開催(於、牡丹峰競技場)。

11日▶金主席、スペイン共産党書記長を接見、スリランカ首相調停室書記一行を接見。

▶共和国代表团(団長、李宗木外交部副部長)国連総会参加のため出発。

12日▶金主席、キューバ共産党代表団を接見、ガイアナ人民民族大会党代表団を接見、コスタリカ社会党代表団を接見、モザンビーク解放戦線代表を接見。

▶金主席特使として鄭準基副総理、イランへ出発(～21日)。

13日▶朝鮮・ウガンダ政府間保健分野での技術協力協定調印(於、平壤)

▶金主席、日本社会党代表団を接見、モーリタニア人民党代表団を接見、ブルンジ民族統一進歩代表団を接見、トーゴ人民連合代表団を接見。

▶マレーシア政府代表団(団長、ガファル農業開発相)平壤着(～17日)。

14日▶外交部スポークスマン声明、米帝の南朝鮮への軍事的支援強化を糾弾。

▶金主席、ルーマニア国家評議会副議長夫妻を接見、ダオメー共和国代表団を接見。

15日▶カンボジア国家元首、シアヌーク親王一行平壤着、金主席ら出迎え(～30日)。

16日▶金主席、マレーシア政府代表団を接見。

▶朝鮮・アルバニア政府間1975～76年度文化交流計画書調印。

17日▶南北調節委共和国側副委員長、ソウル側副委員長に電話文を送る。

▶金主席、シアヌーク親王夫妻歓迎宴を催す。

▶朝鮮・モンゴル間科学技術協力第10回会議議定書調印(於、ウランバートル)。

19日▶政府経済代表団(団長、チャン・ユンピル農業委干潟地、灌溉建設総局長)カンボジアへ出発。

▶金主席銅像除幕式、ワンジェ山で挙行、呉振宇人民軍総参謀長「除幕の辞」。

21日▶ザイール人民革命運動代表団(団長、スジョン・ドミオ・ア・ドクペリゴ政治委員、農業・畜産委員会委員長)平壤着(～31日)。

▶国連総会第一委員会、朝鮮問題の討議開始。

23日▶南北調節委共和国側スポークスマン声明発表(ソウル側の2日付スポークスマン声明に対して)。

▶1万4000トンの大型貨物船「オサンドク」号進水(於、大型船舶工業基地として建設されたパク・シヒョ

ンさんの働く造船所)。

▶第13回南北赤十字実務会議開催。

24日▶マリ共和国国家首相夫人マリアン・トラオレ女史一行平壤着(～28日)。

▶金主席、マリ国家首相夫人を接見。

▶中国人民友好代表団(団長、李志民党中央委員・復干部隊政治委員)平壤着(～29日)。

▶軍事停戦委第368回会議開催——共和国側、アメリカの新核兵器南朝鮮搬入に抗議。

▶ガイアナ政府貿易代表団(団長、ジョージ・アンダーソン・キング貿易相)平壤着(～28日)。

▶中国人民志願軍朝鮮戦線参戦25周年平壤市記念集会開催(於、人民文化宮殿)。

25日▶金主席、毛沢東の子息毛岸英の墓と中国人民志願軍烈士の墓に花輪をおくる(中国人民志願軍参戦25周年)。

27日▶金主席、中国人民友好代表団を接見、ガイアナ政府貿易代表団を接見、オートボルタ民族教育相を接見。

▶ユーゴスラビア共産主義者同盟代表団(団長、スタネ・ドラント中央委常務委員会執行委員会書記)平壤着(～31日)。

▶ユーゴスラビア職業連盟代表団(団長、ドサン・ボグダノフ副議長)平壤着。

▶祖国平和統一委、国連第一委員会におけるアメリカ代表の演説を糾弾する声明発表。

28日▶朝鮮、ガイアナ政府間文化・科学協力協定、経済・技術援助協力協定調印(於、平壤)。

▶シリア・アラブ復興社会党代表団(団長、サミ・アタリ民族指導議員・コマンド事業部長)平壤着(～11月4日)。

29日▶金主席、ユーゴスラビア共産主義者同盟代表団を接見、シアヌーク親王を接見。

▶国連総会第一委、43カ国共同決議案可決(賛51、反38)。

30日▶金主席、ザイール人民革命運動代表団を接見。

31日▶政府声明「国連での票決結果は共和国政府の自主的な祖国平和統一方針と対外政策の偉大な勝利であり世界の進歩的諸国と人民の共同の勝利である」

▶ユーゴスラビア共産主義者同盟代表団の訪朝に関する共同報道発表(於、平壤)。

▶コンゴ国家人民軍総参謀部政治部代表団(団長、ゴマ・フート副参謀長)平壤着(～11月6日)。

11月

2日▶金主席、シリア・アラブ復興社会党代表団を接

見。

3日 ▶朝鮮・中国間1975年度国境鉄道会議議定書調印(於、瀋陽)。

4日 ▶ポーランド政府代表団(団長、フランチシェク・シュラフィッチ副首相)平壤着(～11日)。

▶スウェーデン政府代表団(団長、ベルチル・スウェルド商業省総局長)平壤着(～8日)。

▶世界に類例のない大輸送パイプ、茂山鉦山—清津・金策製鉄所間(98キロメートル)精鉦輸送パイプ工事完工。

▶アラブ復興社会党代表団の訪朝に関する共同報道発表。

6日 ▶朝鮮・ユーゴスラビア政府間航空運輸協定調印(於、ベオグラード)。

▶金主席、訪朝中の日本学者西川潤早大助教授一行を接見。

▶金主席と金一総理、10月革命58周年に際し、ソ連の党・政府指導者に祝電。

7日 ▶「統一新報」(無所属代弁紙)、天道教育友党カン・ジャンス委員長の見論「共産主義者と連合してこそ祖国の自主的平和統一を一日も早くかちとることができる」を掲載。

8日 ▶シンガポール共和国と大使級外交関係樹立。

▶「労働新聞」社説「自主性を擁護する世界人民と団結して反帝自主偉業を促そう」。

9日 ▶果実生産で前例のない大豊作と報道。

10日 ▶「労働新聞」社説「抗日遊撃隊式学習気風を高く發揮して思想・技術・文化革命をいっそう力強く促そう」

▶八つの高等芸術専門学校(平壤、恵山、清津、元山、新義州、沙里院、海州、開城)新設、開校(3月6日に開校式)と報道。

▶金東奎副主席、ポーランド政府代表団と会見。

▶中央放送開始30周年記念報告会開催(於、人民文化宮殿)。

▶朝鮮・ポーランド政府間経済・科学技術協議委第4回会議議定書調印(於、平壤)。

▶朝鮮・エチオピア航空会社間に航空サービス協定締結(於、平壤)。

11日 ▶政府代表団(団長、孔鎮泰副総理)ブルガリアへ出発(～18日帰国)。

▶政府代表団(団長、鄭準基副総理)、ギニアへ出発(～モリタニアをへて12月4日帰国)。

▶アンゴラ独立宣布。ルワンダの慶祝行事に朝鮮政府代表団(団長、キム・ビョンホ駐エジプト大使)参加。

▶「労働新聞」社説「思想革命の炎を高めて全社会の

チュチュ思想化偉業をいっそう力強くおし進めよう」

13日 ▶コモロ国家と外交関係樹立に関する共同コミュニケ調印(於、ニューヨーク)。

▶朝鮮・セネガル政府間、保健分野での技術的協力に関する議定書調印(於、ダカール)。

14日 ▶エジプト・アラブ政府貿易代表団(団長、アフメド・タルラト・モハメド・エル・ナハル外国貿易省次官)平壤着(～21日)。

▶赤十字中央委、南朝鮮支配層の「反共」騒動を糾弾して声明——ソウル決起大会、墓参団問題など。

15日 ▶外交部スポークスマン、米国と南朝鮮の好戦分子の戦争挑発を糾弾——陸海空軍と郷土予備軍の合同海上上陸作戦訓練、海空「高波2号」作戦など。

▶朝鮮・ブルガリア政府間経済・科学技術協議委第7回会議議定書調印(於、ソフィア)。

16日 ▶朝鮮・アルバニア間科学技術協力委第9回会議議定書調印(於、チラナ)。

17日 ▶「労働新聞」論評「日本側はわれわれの人道主義的措置を悪用してはならない」——「松生丸」問題についての田川船長発言や一部の公的人物発言を非難。

▶金主席参席のもと、朝鮮民主女性同盟創立30周年記念報告会開催(於、人民文化宮殿)、金聖愛委員長記念報告、「偉大な首領金日成同志にささげる誓いの手紙」を採択。

18日 ▶金東奎副主席、中国銀行代表団(団長、喬培新総裁)と会見。

▶ブルガリア政府通商代表団(団長、ツベタ・ペトコフ外国貿易省次官)平壤着(～25日)。

▶日本「毎日新聞」五味三勇編集局長ら平壤着(～28日)。

▶金主席参席のもと、金日成政治大学・姜健総合軍官学校創立30周年記念報告会開催(於、2.8文化会館)、李勇武「開会の辞」、金一「金日成人民軍最高司令官命令」を伝達、呉振宇記念報告——命令「敵の欺瞞的な『平和』術策には革命的原則をもって対処し、侵略戦争には革命戦争をもってこたえなければならない。」「人民軍の戦闘力を極力強化し、全般的な戦闘準備を完成するために教育教養事業で速度戦の炎を高めなければならない。」

▶国連総会本会議、43カ国共同決議案を可決(賛51、反38)。

19日 ▶共和国代表団、国連総会における朝鮮問題の討議終了と関連して声明発表。

▶朝鮮労働党中央委員会第5期第11回総会開催(～21日)——1976年人民経済計画について討議。来年度に未緩衝生産高地を占領し、新たな建設のための準備事業を全面的に展開することを強調。

20日 ▶政府代表团(团长, 朴成哲副総理) ザイール共和国へ出発(〜12月4日)。

▶朝鮮・エジプト・アラブ政府間1976年度商品流通議定書調印(於, 平壤)——工作機械および工具, 合金鋼材・マグネシアクリンカーなどを輸出, 線綿, 燐灰石などを輸入。

21日 ▶朝鮮中央通信社, 日本政府当局の「松生丸」事件と関連する態度を非難。

▶ルーマニア政府代表团(团长, イオン・ストヤン外国貿易省次官) 平壤着。

▶西南アフリカ人民組織代表团(团长, サム・ヌジョア委員長) 平壤着(〜25日)。

22 ▶平壤でブルガリア医薬品, 化粧品, 通信機械, 技術展覧会開催(〜30日)。

23日 ▶金主席, 西南アフリカ人民組織代表团を接見。

24日 ▶朝鮮・ブルガリア政府間1976〜80年度長期貿易協定, 76年商品納入・支払議定書調印(於, 平壤)——機械・設備・鋼材類・マグネシアクリンカー, 薄荷油, 葉タバコを輸出, 機械・設備, 化学製品類, 医薬品を輸入。

25日 ▶北部高山地帯の両江道地方でリンゴ豊作と報道。

▶ブルガリア人民議会代表团(团长, ペコ・タコフ副議長) 平壤着(〜12月2日)。

26日 ▶金主席, 「毎日新聞」編集部長, 外信部長を接見。

▶朝鮮労働党友好参観団(团长, 金煥中央委部長) 中国に出発。

▶モリタニアで金主席の贈物ヌアクションショット女子・子供服工場操業式挙行。

27日 ▶モリタニア独立15周年記念平壤市大衆集会開催(於, 人民文化宮殿)。

▶ユーゴスラビア映画上映週間開幕(〜12月3日)。

28日 ▶日本社会党田英夫参議院議員平壤着(〜12月2日)。

▶赤十字会代表团声明を発表。南朝鮮側の不誠意と「老父母問題」「墓参団」提案を糾弾。

▶第14回南北赤十字実務会議開催。

29日 ▶朝鮮平和擁護民族委代表团, インドのパटना市でひらかれるファシズムに反対する国際会議参加のため出発。

▶トゴ人民連合創建6周年平壤市記念集会開催(於牡丹峰劇場)。

▶ブルガリア人民議会代表团歓迎平壤市大衆集会開催(於, 人民文化宮殿)。

▶剣徳鉦山従業員「三大革命赤旗獲得運動」決起集会を開催。

2日 ▶国連総会参加の朝鮮代表团帰国。

▶朝鮮・中国科学技術協力委第16回会議議定書調印(朝鮮側化学工業部副部長, 中国側石油化学工業部副部長調印, 於, 平壤)。

▶青山協同農場員の「三大革命赤旗獲得運動」決起集会開催。

▶朝鮮・イラン間1976年度商品流通に関する議定書調印(於, テヘラン)。

▶平壤各紙, ラオス人民民主共和国樹立を熱烈に祝賀。

3日 ▶「三大革命赤旗獲得運動」を大衆的に力強くくりひろげるための平壤市動労者大衆集会開催(於, 金日成広場) 10余万人参集。

4日 ▶ルーマニア政府代表团(团长, パウル・ニクレスクミジル副首相) 平壤着(〜19日)。

5日 ▶金主席の委任により61回目の教育援助費・奨学金を在日同胞子女に送付(6億1335万円, 累計206億4160万5533円)。

6日 ▶労働党代表团(团长, 徐哲中央委政治委員) ポーランドへ出発(〜14日)。

7日 ▶「労働新聞」論説「全国的な民族統一戦線を形成することは祖国統一をかちとるための重要な保証」

8日 ▶金主席, ルーマニア政府代表团を接見。

9日 ▶朝鮮・ルーマニア政府間経済・科学技術協議委第6回会議議定書, 1976年度商品流通・支払議定書調印(於, 平壤)。

10日 ▶軍事停戦委第369回会議開催。

▶「三大革命赤旗獲得運動」工業部門全域におよぶと報道。

▶「労働新聞」社説「偉大な首領がともした『三大革命赤旗獲得運動の炎』を全国に燃えさかせよう」

▶政府貿易代表团(团长, パン・テリユル貿易部副部長) モンゴルへ出発(〜26日)。

11日 ▶第175次帰国船, 清津港着。

▶朝鮮・ユーゴスラビア政府間郵便・電気通信協力協定調印(於, ベオグラード)。

12日 ▶民主ベトナム政府貿易代表团(团长, ウェン・チャン貿易省次官) 平壤着(〜20日)。

▶茂山で, 金主席が茂山―清津間の精鉦輸送パイプの建設に参加した労働者, 科学者, 技術者, 事務員に送る祝賀文伝達集会開催。

▶ルーマニア駐在朝鮮大使(パク・チュングク) シア

12月

1日 ▶金主席, ブルガリア人民議会代表团を接見。

ヌーク親王を表敬訪問（於、ブカレスト）。

13日 ▶労働党代表団（団長、朴成哲副総理）キューバへ出発（～27日）。

▶全農村で「三大革命赤旗獲得運動」の炎がはげしく燃えさかっていると報道。

14日 ▶「民主朝鮮」紙論説、「主体的な青少年運動の発展における歴史的な出来事」（セナル少年同盟創立49周年）。

15日 ▶南朝鮮青年学生の闘争を支持し、朴一味の学園弾圧を糾弾する平壤市大学生集会開催（於、人民文化宮殿）。

▶朝鮮・チェコスロバキア政府間1976～77年度文化協力計画書調印（於、平壤）。

▶職総中央委第9回総会「三大革命赤旗獲得運動」について討議（～16日）。

16日 ▶「三大革命赤旗獲得運動」の炎、教育部門にも急速拡大と報道。

▶ポーランド政府通商代表団（団長、トゴシュ・スタニスラフ外国貿易省次官）平壤着。

17日 ▶朝鮮中央通信論説「全社会をインテリ化することは文化革命のもっとも重要な目標」

18日 ▶朝鮮・ソ連科学院間1976～77年度科学協力に関する事業計画書調印（於、モスクワ）。

▶「労働新聞」社説「郡協同農場経営委員会の役割を高めて農業に対する指導管理をいっそう改善しよう」

▶「労働新聞」論説「団結と協力は第三世界諸国の革命偉業勝利の重要な保証」

19日 ▶朝鮮・ベトナム民主共和国政府間長期貿易協定書（1976～80年）調印（於、平壤）。

▶人民軍軍人、ユーゴスラビア軍隊節を祝賀（於、金日成軍事総合大学）。

▶朝鮮・モンゴル政府間1976年度商品流通・支払議定書と1976～80年間商品流通・支払協定調印（於、ウランバートル）。

20日 ▶朝鮮中央通信社論説「愛国的青年学生を弾圧する南朝鮮かいらいは歴史の審判をうけるであろう」

21日 ▶「三大革命赤旗獲得運動」の炎、文化芸術・保健部門にも燃えさかっていると報道。

22日 ▶朝鮮・民主イエメン政府間文化協力協定調印（於、アデン）

▶「労働新聞」論評「いかなるでっちあげと暴圧をもってしても青年学生の愛国的進出を阻むことはできない」

▶「労働新聞」論説「思想革命は社会のすべての成員を共産主義の人間につくるもっとも重要な革命課題」

23日 ▶朝鮮中央通信「1975年の南朝鮮政治情勢概観」

▶「労働新聞」論評で、アンゴラに魔手をのばす米帝と南アフリカ人種主義者を糾弾。

▶東海漁場で、明太の1日漁獲高を1万トン水準に高める一大飛躍がとげられていると報道。

▶「労働新聞」論説「『三段階統一』論は永久分裂論である」

24日 ▶最近、女盟中央委第4期第6回総会が平壤で開催されたと報道。金聖愛委員長報告——「三大革命赤旗獲得運動」に積極的に参加することは、全女盟員の崇高な義務である。

25日 ▶朝鮮中央通信「1975年度南朝鮮経済概観」

▶サントーメ・プリンシペ民主共和国大統領マヌエル・ピント・ダ・コスタ夫妻、平壤着、金主席夫妻ら出迎え。盛大な歓迎宴開催（於、万寿台議事堂）（～29日）。

26日 ▶「戦線東部」カムボン東側非武装地帯で人民軍砲所、南側の砲撃をうける。

▶朝鮮中央通信「1975年国際情勢概観」

▶社会主義憲法節中央講演会、鄭準基副総理演説。

27日 ▶軍事停戦委朝中側首席委員にハン・ジュギョン少将を任命。

28日 ▶サントーメ・プリンシペ大統領夫妻、金主席夫妻のために宴会開催。金主席欠席し金聖愛夫人のみ出席。（以後、長期にわたって金主席公式の席上に出現せず）

29日 ▶朝鮮・サントーメ・プリンシペ政府間経済・技術援助協定調印（於、平壤）。